

四街道市出口遺跡（3）・ 小屋ノ内遺跡（4）

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXV－

平成29年2月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

よつ かい どう で ぐち い せき
四街道市出口遺跡（3）・

こ や うち い せき
小屋ノ内遺跡（4）

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXV－



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第765集として、独立行政法人都市再生機構の物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市出口遺跡・小屋ノ内遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

出口遺跡・小屋ノ内遺跡ともに、発掘調査報告書は3冊目になりますが、既報告書と同様、古墳や奈良・平安時代堅穴住居跡などが検出され、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

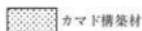
平成29年2月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 平 林 秀 介

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡の所在地・遺跡コード・各遺跡報告書号数・調査地点等は、以下のとおりである。
出口遺跡 四街道市物井字出口1406-14の一部ほか（遺跡コード 228-012）
3 冊目 第17次～19次調査区（省略表記例：17区、(17)）
小屋ノ内遺跡 四街道市物井字小屋ノ内1330-1ほか（遺跡コード 228-013）
4 冊目 第17次～19次調査区（省略表記例：17区、(17)）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は、第1章に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、主任上席文化財主事 井上哲朗が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」(NI-54-19-14-2)（平成17年発行）
第2～4、7～10、16・17・23図 独立行政法人都市再生機構作成 物井地区現況図（1/2,500）
を元に加筆
第6図 参謀本部陸軍部測量局 1/20,000 迅速測図「下志津村」・「佐倉」（明治20年版）
- 8 図版1の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した座標の基本は日本測地系であり、図面の方位は全てその座標北を示すが、一部には併記し、報告書抄録には世界測地系を記した。
- 10 遺構及び遺物の凡例は、以下のとおりである。

遺構



カマド構築材



焼土



柱穴内柱のあたり



硬化面

遺物



(断面) 土器・
陶磁器



(断面) 須恵器

目 次

| | |
|----------------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第1節 調査の概要 | 1 |
| 1 調査の経緯と経過 | 1 |
| 2 調査の方法 | 7 |
| 第2節 遺跡の位置と環境 | 9 |
| 1 周辺の地形 | 9 |
| 2 周辺の遺跡 | 9 |
| 第2章 出口遺跡 (17)～(19) | 19 |
| 第1節 調査結果概要 | 19 |
| 第2節 旧石器時代 | 19 |
| 第3節 縄文時代 | 19 |
| 第4節 古墳時代 | 22 |
| 第5節 中・近世 | 25 |
| 第3章 小屋ノ内遺跡 (17)～(19) | 27 |
| 第1節 調査結果概要 | 27 |
| 第2節 旧石器時代 | 27 |
| 第3節 縄文時代 | 27 |
| 第4節 奈良・平安時代 | 30 |
| 1 竪穴住居跡 | 30 |
| 2 掘立柱建物跡 | 32 |
| 3 土坑 | 33 |
| 4 遺物全体の様相 | 33 |
| 第5節 中・近世 | 34 |
| 第4章 まとめ | 40 |
| 第1節 出口遺跡 | 40 |
| 第2節 小屋ノ内遺跡 | 40 |
| 第3節 物井地区遺跡群調査概要 | 41 |

報告書抄録

挿 図 目 次

| | | | |
|----------------------------|---|------------------|---|
| 第1図 出口・小屋ノ内遺跡の位置と 周辺の遺跡 | 2 | 第2図 物井地区遺跡分布図 | 5 |
| | | 第3図 出口遺跡年度別調査区域図 | 6 |

| | | | |
|------|---------------------------------|------|--|
| 第4図 | 小屋ノ内遺跡年度別調査区域図……………7 | 第14図 | (17) SD-001・(18) SD-002……………25 |
| 第5図 | グリッド設定法……………8 | 第15図 | 出土遺物……………26 |
| 第6図 | 明治時代物井地区周辺地形図……………10 | 第16図 | 小屋ノ内遺跡下層調査全体図……………28 |
| 第7図 | 物井古墳群分布状況図……………15・16 | 第17図 | 小屋ノ内遺跡(17)～(19)周辺上層 遺構全体図……………29 |
| 第8図 | 小屋ノ内遺跡及び周辺遺構全体図 ……………17・18 | 第18図 | 縄文時代の遺構・遺物……………30 |
| 第9図 | 出口遺跡下層調査全体図……………20 | 第19図 | (19) SI-122……………31 |
| 第10図 | 出口遺跡(17)～(19)上層遺構 全体図……………21 | 第20図 | (19) SB-154・155……………33 |
| 第11図 | (17) SK-001……………22 | 第21図 | (19) SK-666, (19) SX-019, (17・18) SD-082～084……………35 |
| 第12図 | 18次調査区及び隣接区……………23 | 第22図 | (17) SD-021……………36 |
| 第13図 | (18) D03号墳・(19) D15号墳……………24 | 第23図 | 物井地区上層遺構全体図……………45・46 |

表 目 次

| | | | |
|-----|----------------------|-----|----------------------|
| 第1表 | 物井地区周辺遺跡表……………3 | 第4表 | 小屋ノ内遺跡出土遺物組成表……………39 |
| 第2表 | 小屋ノ内遺跡出土土器観察表……………38 | 第5表 | 物井地区遺跡・時期別遺構数……………42 |
| 第3表 | 小屋ノ内遺跡出土銭貨計測表……………38 | | |

図 版 目 次

| | | | |
|-----|---|------|---|
| 図版1 | 遺跡周辺航空写真(約1/10,000 昭和44年撮影) | 図版9 | 小屋ノ内遺跡 (17B) SD-021・082 |
| 図版2 | 出口遺跡 (17) SK-001, (17) SD-001, (17) 下層確認状況 | 図版10 | 小屋ノ内遺跡 (17C) SD-083, (18) SD-083 |
| 図版3 | 出口遺跡 (18) D03号墳, (18) SD-002, (19) D15号墳 | 図版11 | 小屋ノ内遺跡 (18) SD-083・084 |
| 図版4 | 小屋ノ内遺跡 (18) 20R-49土層断面, (17) SK-665, (19) SI-122 | 図版12 | 出口遺跡 (18) 遺物 小屋ノ内遺跡 (17) 縄文土器 |
| 図版5 | 小屋ノ内遺跡 (19) SI-122カマド(1)・(2), (19) SB-154・155 | 図版13 | 小屋ノ内遺跡 (19) SI-122遺物-1 |
| 図版6 | 小屋ノ内遺跡 (19) SK-666, (19) SX-019 | 図版14 | 小屋ノ内遺跡 (19) SI-122遺物-2, (17) SD-021中・近世遺 物-1, (17) SD-021古墳時代以降遺物 |
| 図版7 | 小屋ノ内遺跡 (17A) SD-021 | 図版15 | 小屋ノ内遺跡 (17) SD-021中・近世遺物-2 |
| 図版8 | 小屋ノ内遺跡 (17A) SD-021, (17B) SD-021 | | |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過（第1～4図、第1・5表）

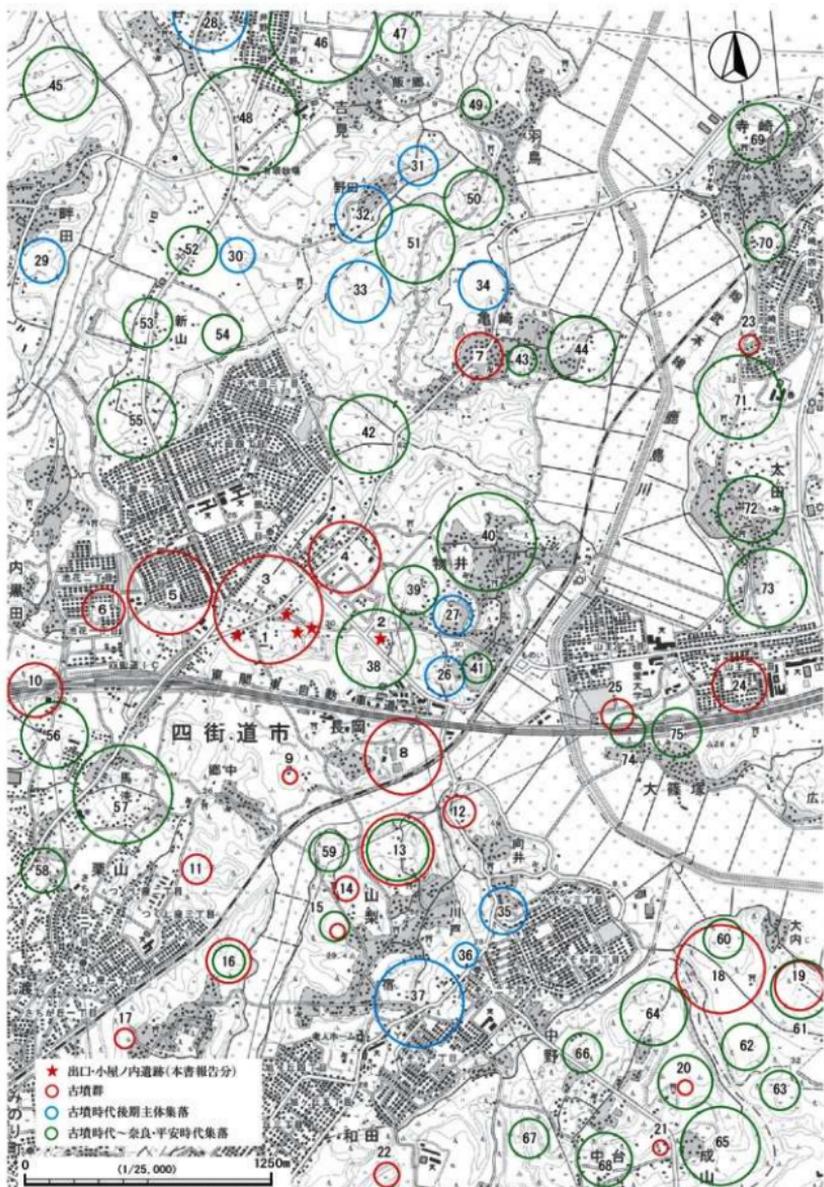
独立行政法人都市再生機構が実施する千葉県四街道市物井地区の土地区画整理事業地内には、多くの埋蔵文化財が存在する。その取扱いについては、千葉県教育委員会の指導のもと、一部の保存地域を除き、記録保存の措置が講じられることになり、公益財団法人千葉県教育振興財団が受託し、昭和59年度から調査を実施してきた。平成27年度までに21冊の報告書を刊行し、本年度は4冊の報告書刊行が予定され、本書が最後となる¹⁾（第5表）。

物井地区の台地上には、ほぼ全域にわたって遺跡が分布している（第1・2図）。古屋城跡と出口遺跡の一部は保存され、公園整備が進行中であるが、記録保存の対象とされたのは、本書で報告する出口遺跡・小屋ノ内遺跡をはじめとして、南に隣接する出口・鐘塚遺跡、北に隣接する清水遺跡・新久遺跡、東に隣接する館ノ山遺跡・嶋越遺跡、北東方の御山遺跡・稲荷塚遺跡・郷遺跡・古屋城跡・北ノ作遺跡・中久喜遺跡、南方の棒山・呼戸遺跡・高堀遺跡である。そして、都市再生機構による物井地区土地区画整理事業範囲では、既存建物や急傾斜地など調査のできない地区や保存地区を除き、約44haの発掘調査を終了しており、同事業範囲での未調査地点は、県文化財課や四街道市教育委員会による、狭小な面積や調査上危険な範囲の工事立会や慎重工事の指示が基本となることが推察される。

本書で報告する出口遺跡は、物井地区事業範囲の西端、旧住所四街道市物井（字出口）1,400番台、現住居表示の四街道市もねの里2丁目付近に位置する。発掘調査は昭和62年度に開始し、平成25年度まで19次にわたって実施された。このうち16次までの上層（縄文時代以降）の調査成果については、平成23年度に『四街道市出口遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ－』として、下層（旧石器時代）の調査成果については、平成25年度に『四街道市出口遺跡 旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－』としてそれぞれ刊行した。本書に収録したのは、平成23年度と平成25年度に実施した第17次から19次までの1,606㎡の調査成果である。これまでの出口遺跡の主な調査成果は、旧石器時代環状ブロックと古墳群であり、調査完了面積は43,000㎡である。

また、小屋ノ内遺跡は、物井地区事業範囲の中央部付近、現住居表示の四街道市物井（字小屋ノ内）1,300番台に位置する。発掘調査は平成元年度に開始し、平成27年度まで出口遺跡同様19次にわたって実施された。このうち、平成元年度～平成12年度の下層の調査成果は、平成17年度に『四街道市小屋ノ内遺跡（1）旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』、平成元年度～平成10年度の上層の調査成果は『四街道市小屋ノ内遺跡（2）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』、平成12年度～平成15年度の上下層の調査成果は『四街道市小屋ノ内遺跡（3）－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』としてそれぞれ刊行した。本書に収録したのは、平成26年度～平成27年度に実施した第17次から19次までの666㎡の調査成果である。これまでの小屋ノ内遺跡の主な調査成果は、旧石器時代環状ブロックと奈良・平安時代集落で、調査完了面積は約79,000㎡である。

なお、本書では、両遺跡の調査次数を（ ）内の数字で表記し、省略した（例：（17）SK-001＝第17次調



第1図 出口・小屋ノ内遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 物井地区周辺遺跡表 (番号は第1図に対応 古墳時代～平安時代のみ)

| 番号 | 市町村名 | 遺跡名 | 理文分布 図番号 | 時期 | 種類 | 番号 | 市町村名 | 遺跡名 | 理文分布 図番号 | 時期 | 種類 |
|----|------|-------------------|---|-----------------|------------|----|------|---------------------------|--------------|---------|-----|
| 1 | 四街道市 | 出1遺跡(17)～(19) | 20-4 | 古墳時代後期 | 古墳 | 39 | 四街道市 | 船荷塚遺跡 | 17 | 古墳～平安時代 | 集落跡 |
| 2 | 四街道市 | 小屋ノ内遺跡(17)～(19) | 18 | 古墳時代後期 | 古墳 | 40 | 四街道市 | 古塚尾跡・北ノ作遺跡 (松葉作遺跡)・藤道跡 | 12・13・ 14 | 奈良・平安時代 | 集落跡 |
| 3 | 四街道市 | 物井古墳群(清水・新久・出1遺跡) | 20-1-4 | 古墳時代後期 | 古墳 | 41 | 四街道市 | 船越遺跡(馬場No2遺跡) | 16 | 奈良・平安時代 | 集落跡 |
| 4 | 四街道市 | 御山古墳群 | 19 | 古墳時代後期 | 古墳 | 42 | 四街道市 | 鶴口遺跡 | 9 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 5 | 四街道市 | 千代田古墳群 | 23 | 古墳時代後期 | 古墳 | 43 | 四街道市 | 下台遺跡 | 5 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 6 | 四街道市 | 池花古墳群 | 43 | 古墳時代後期 | 古墳 | 44 | 四街道市 | 馬場台遺跡 | 3・4 | 古墳時代 | 包蔵地 |
| 7 | 四街道市 | 鍛冶内遺跡・殿台遺跡 | 6・7 | 古墳時代後期 | 古墳 | 45 | 佐倉市 | 野田川陸軍道跡 | 115 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 8 | 四街道市 | 入ノ台遺跡 | 29 | 古墳時代後期 | 古墳 | 46 | 佐倉市 | 吉見古墳跡 | 189 | 古墳～平安時代 | 集落跡 |
| 9 | 四街道市 | 野戸遺跡 | 27 | 古墳時代後期 | 古墳 | 47 | 佐倉市 | 吉見船荷山遺跡 | 190 | 古墳～平安時代 | 集落跡 |
| 10 | 四街道市 | 大洲遺跡 | 44 | 古墳時代 | 古墳 | 48 | 佐倉市 | 日井屋敷跡遺跡 | 185 | 平安時代 | 集落跡 |
| 11 | 四街道市 | 太郎山下古墳群 | 33 | 古墳時代 | 古墳 | 49 | 佐倉市 | 羽島西ノ内遺跡 | 182 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 12 | 四街道市 | 西向舟遺跡 | 126 | 古墳時代 | 古墳 | 50 | 佐倉市 | 羽島外海邊遺跡 | 181 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 13 | 四街道市 | 相ノ谷遺跡 | 124 | 古墳時代後期 | 古墳 | 51 | 佐倉市 | 羽島南原遺跡 | 180 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 14 | 四街道市 | 川ノ口遺跡 | 123 | 古墳時代後期 | 古墳 | 52 | 佐倉市 | 生谷三拾塚遺跡 | 173 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 15 | 四街道市 | 宿遺跡 | 134 | 古墳時代前期・ 平安時代 | 古墳・ 集落跡 | 53 | 佐倉市 | 生谷吉新山北遺跡 | 170 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 16 | 四街道市 | 和田遺跡・西畑遺跡 | 62・63 | 古墳時代 | 古墳 | 54 | 佐倉市 | 吉見新山遺跡 | 172 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 17 | 四街道市 | 通作遺跡 | 211 | 古墳時代後期 | 古墳 | 55 | 佐倉市 | 生谷吉新山南遺跡 | 171 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 18 | 佐倉市 | 馬渡浅間臨古墳群・馬渡宮古墳群 | 471・ 472・ 911・ 912・473 ～475 | 古墳時代 | 古墳 | 56 | 四街道市 | 新山遺跡 | 45 | 平安時代 | 集落跡 |
| 19 | 佐倉市 | 馬渡向原古墳群 | 482・483 | 古墳時代 | 古墳 | 57 | 四街道市 | 馬渡No1遺跡 | 47 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 20 | 四街道市 | 権現堂遺跡 | 361 | 古墳・奈良・平 安時代 | 古墳・ 集落跡 | 58 | 四街道市 | 平台No1遺跡 | 50 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 21 | 四街道市 | 下ノ内遺跡 | 162 | 古墳時代 | 古墳 | 59 | 四街道市 | 中山遺跡 | 122 | 奈良・平安時代 | 集落跡 |
| 22 | 四街道市 | 作No2遺跡 | 151 | 古墳時代 | 古墳 | 60 | 佐倉市 | 馬渡大尺遺跡 | 470 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 23 | 佐倉市 | 寺崎向原A・B・C地区遺跡 | 379 | 平安時代 | 集落跡 | 61 | 佐倉市 | 馬渡向原遺跡 | 496 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 24 | 佐倉市 | 大藤塚古墳群 | 455・457 | 古墳時代 | 古墳 | 62 | 佐倉市 | 馬渡山ノ内保遺跡 | 497 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 25 | 佐倉市 | 大藤塚西台古墳群 | 453・454 | 古墳時代 | 古墳 | 63 | 佐倉市 | 馬渡山ノ内遺跡 | 498 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 26 | 四街道市 | 船ノ山遺跡(馬場No2遺跡) | 16 | 古墳時代後期 | 集落跡 | 64 | 四街道市 | 野野遺跡 | 156 | 奈良・平安時代 | 集落跡 |
| 27 | 四街道市 | 馬場No1遺跡 | 15 | 古墳時代 | 包蔵地 | 65 | 四街道市 | 南作遺跡 | 164 | 奈良・平安時代 | 集落跡 |
| 28 | 佐倉市 | 生谷新畑遺跡 | 192 | 古墳時代 | 包蔵地 | 66 | 四街道市 | 東作遺跡 | 157 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 29 | 佐倉市 | 野田川橋遺跡 | 104 | 古墳時代 | 包蔵地 | 67 | 四街道市 | 船越遺跡 | 159 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 30 | 佐倉市 | 吉見三拾塚遺跡 | 174 | 古墳時代後期 | 包蔵地 | 68 | 四街道市 | スウノ遺跡 | 160 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 31 | 佐倉市 | 吉見小竹山遺跡 | 179 | 古墳時代後期 | 包蔵地 | 69 | 佐倉市 | 寺崎ノ内遺跡 | 374 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 32 | 佐倉市 | 吉見古海邊遺跡 | 177・178 | 古墳時代後期 | 包蔵地 | 70 | 佐倉市 | 寺崎向原D地区遺跡 | 378 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 33 | 四街道市 | 内山遺跡 | 207 | 古墳時代後期 | 包蔵地 | 71 | 佐倉市 | 太田川替遺跡 | 381 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 34 | 四街道市 | 池下遺跡 | 1 | 古墳時代後期 | 集落跡 | 72 | 佐倉市 | 太田宮馬場遺跡 | 387 | 古墳～平安時代 | 包蔵地 |
| 35 | 四街道市 | 板台遺跡 | 127 | 古墳時代後期 | 包蔵地 | 73 | 佐倉市 | 太田新田遺跡 | 389 | 平安時代 | 包蔵地 |
| 36 | 四街道市 | 井戸作遺跡 | 136 | 古墳時代後期 | 包蔵地 | 74 | 佐倉市 | 大藤塚西台遺跡 | 881 | 平安時代 | 集落跡 |
| 37 | 四街道市 | 今宿台遺跡・東作遺跡 | 133・134 | 古墳時代後期 | 包蔵地 | 75 | 佐倉市 | 大藤塚遺跡 | 451・452 | 古墳～平安時代 | 集落跡 |
| 38 | 四街道市 | 小屋ノ内遺跡 | 18 | 古墳～平安時代 | 集落跡 | | | | | | |

査のSK-001)。過去の調査では、同一地点を複数年次で調査している例もあるが、本書で報告する部分は調査年次と地点が一致している。

本書で報告する発掘調査の期間・担当者等は下記のとおりである。調査地点は、第3・4図を参照されたい。

平成23年度 出口遺跡(17)

調査期間 平成23年11月21日～平成23年11月29日
 調査面積 (規模) 176㎡ (確認調査) 上層176㎡ / 176㎡, 下層8㎡ / 176㎡
 (本調査) 上層176㎡, 下層0㎡

調査研究部長 及川淳一
 北部調査事務所長 野口行雄
 調査担当者 上席研究員 矢本節朗

平成25年度 出口遺跡(18)

| | |
|--------|---|
| 調査期間 | 平成25年6月3日～平成25年6月25日 |
| 調査面積 | (規模) 636㎡ (確認調査) 上層636㎡ / 636㎡, 下層13㎡ / 636㎡ (本調査) 上層603㎡, 下層 0㎡ |
| 調査研究部長 | 伊藤智樹 |
| 整理課長 | 今泉 潔 |
| 調査担当者 | 主任・席文化財主事 山口典子 |

出口遺跡(19)

| | |
|-------|---|
| 調査期間 | 平成25年6月27日～平成25年7月18日 |
| 調査面積 | (規模) 794㎡ (確認調査) 上層794㎡ / 794㎡, 下層20㎡ / 794㎡ (本調査) 上層140㎡, 下層 0㎡ |
| 調査担当者 | 主任・席文化財主事 山口典子・糸川道行・森本和男 |

平成26年度 小屋ノ内遺跡(17)

| | |
|--------|---|
| 調査期間 | 平成26年11月21日～平成26年12月25日 |
| 調査面積 | (規模) 526㎡ (確認調査) 上層526㎡ / 526㎡, 下層20㎡ / 526㎡ (本調査) 上層329㎡, 下層 0㎡ |
| 調査研究部長 | 伊藤智樹 |
| 整理課長 | 今泉 潔 |
| 調査担当者 | 主任・席文化財主事 糸川道行 |

小屋ノ内遺跡(18)

| | |
|-------|---|
| 調査期間 | 平成27年2月24日～平成27年3月11日 |
| 調査面積 | (規模) 60㎡ (確認調査) 上層60㎡ / 60㎡, 下層9㎡ / 60㎡ (本調査) 上層60㎡, 下層 0㎡ |
| 調査担当者 | 主任・席文化財主事 糸川道行 |

平成27年度 小屋ノ内遺跡(19)

| | |
|----------|---|
| 調査期間 | 平成27年8月3日～平成27年8月12日 |
| 調査面積 | (規模) 80㎡ (確認調査) 上層80㎡ / 80㎡, 下層4㎡ / 80㎡ (本調査) 上層80㎡, 下層 0㎡ |
| 文化財センター長 | 小久貫隆史 |
| 整理課長 | 岸本雅人 |
| 調査担当者 | 主任・席文化財主事 麻生正信 |

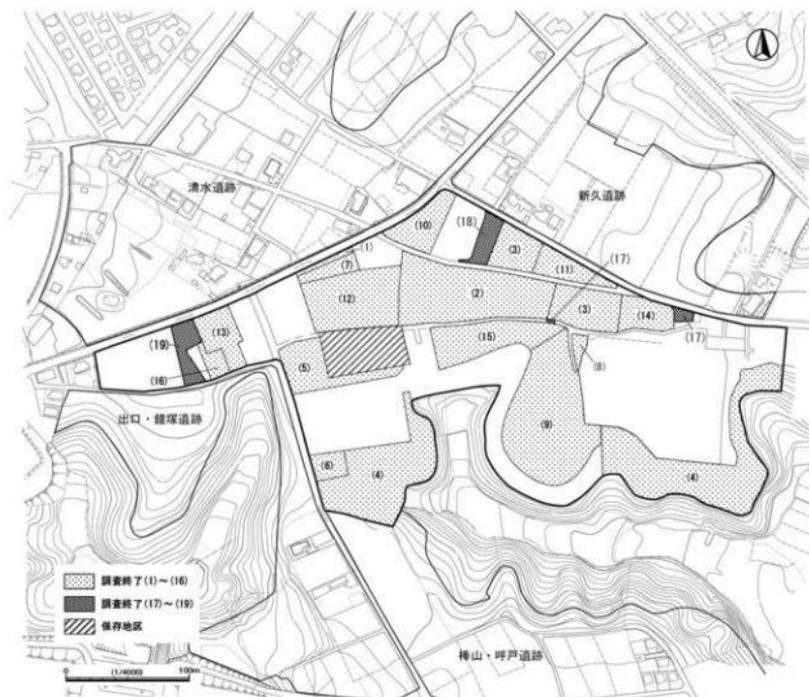
また、整理作業の期間・担当者等は下記のとおりである。

平成28年度 小屋ノ内遺跡 (17)・(18)・(19)

| | |
|----------|--|
| 整理期間 | 平成28年4月1日～6月15日 |
| 整理内容 | 水洗・注記、記録整理、接合、実測、拓本、トレース、挿図、遺物撮影、写真図版、原稿 |
| 文化財センター長 | 上守秀明 |



第2图 物井地区道路分布图



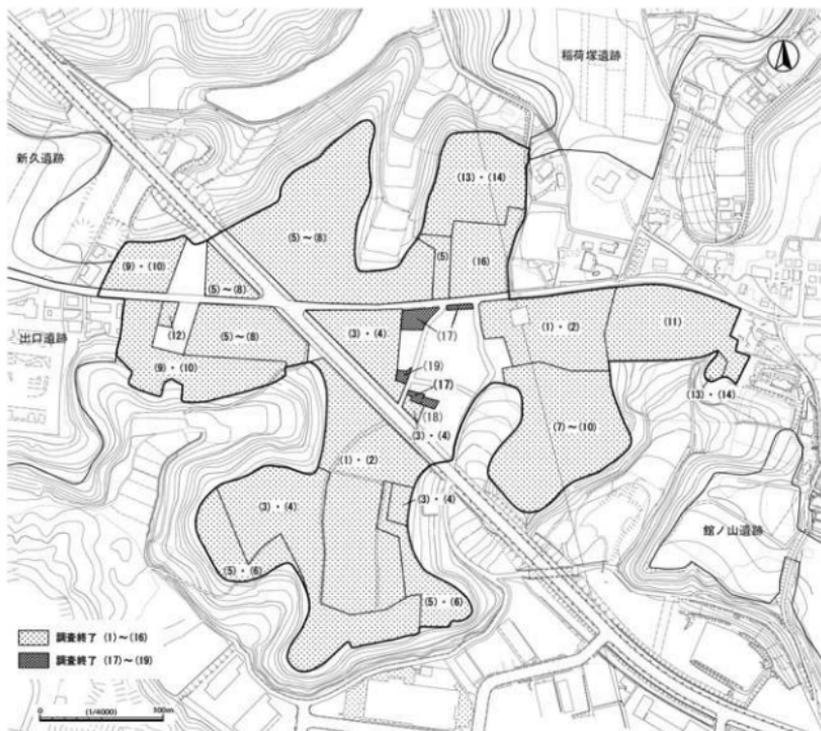
| | | | | | | | | | | |
|--------|------|-------|-------|--------|-------|-------|------|------|-------|-------|
| 調査次 | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) | (9) | (10) |
| 調査年度 | S62 | S63 | H5 | H9 | H10 | H12 | H13 | | H18 | H19 |
| 規模 (㎡) | 約55 | 5,250 | 3,000 | 13,300 | 1,590 | 650 | 550 | 245 | 6,300 | 1,273 |
| 調査次 | (11) | (12) | | (13) | (14) | (15) | (16) | (17) | (18) | (19) |
| 調査年度 | H19 | | H20 | | | H21 | H22 | H23 | H25 | |
| 規模 (㎡) | 991 | 3,087 | | 1,205 | 700 | 2,720 | 304 | 176 | 636 | 794 |

(1) 工事立会

合計 約42,826㎡

第3図 出口遺跡年度別調査区域図

整理課長 山口典子
 整理担当者 主任上席文化財事 井上哲朗
 出口遺跡(17)・(18)・(19)
 整理期間 平成28年6月16日～7月29日
 整理内容 記録整理、実測、トレース、挿図、遺物撮影、写真図版、原稿
 文化財センター長 上守秀明
 整理課長 山口典子
 整理担当者 主任上席文化財事 井上哲朗

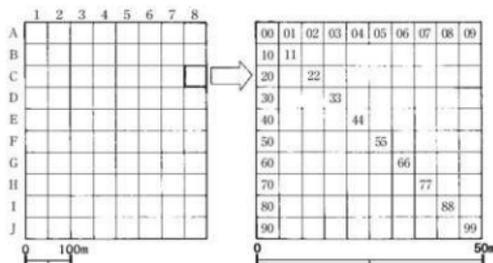


| | | | | | | | | | | | |
|--------|--------|------|--------|------|--------|-------|------|-------|------|------|------------|
| 調査次 | (1) | (2) | (3) | (4) | (5) | (6) | (7) | (8) | (9) | (10) | |
| 調査年度 | H元 | H2 | H3 | H4 | H5 | | H6 | | H7 | | |
| 規模 (㎡) | 15,550 | | 12,650 | | 29,000 | | | 5,300 | | | |
| 調査次 | (11) | (12) | (13) | (14) | (15) | (16) | (17) | (18) | (19) | | |
| 調査年度 | H8 | H10 | H12 | | H14 | H15 | H26 | | H27 | | |
| 規模 (㎡) | 6,600 | 200 | 4,790 | | 740 | 3,470 | 526 | 60 | 80 | | 合計 78,966㎡ |

第4図 小屋ノ内遺跡年度別調査区域図

2 調査の方法 (第5図)

物井地区では、事業範囲全域を公共座標（日本測地系…平面直角座標第Ⅸ系）に基づく方眼網で覆い、50m×50mの区画を大グリッドとした。大グリッドの名称は、方眼網の北西隅を起点に東へ1・2・3…、南へA・B・C…と各区画毎に数字又はアルファベットを割り振り、1Aや5Cのように両者を組み合わせて使用した。大グリッドは、その内部を5m×5mの区画に100分割した北西隅を00とし、東へ01・02…、南へ10・20…と割り振り、南東隅が99となるようにした。これを大グリッドの名称と組み合わせ8C・08のように表記し、調査時に検出した遺構や遺物の位置を、この方眼網を基準に測定し記録した。また遺構・遺物の記録時に用いた標高は、東京湾平均海面（T.P.）からの海拔高である。各地点の調査前に測量業者



第5図 グリッド設定法

に基準点測量を委託し、現場に基準杭を設定して調査を実施した。

出口遺跡(17)~(19) (第3図)

調査地点は、当遺跡の北寄りの4か所で、第17次調査は2か所に分かれる。第17次調査は176㎡、第18次調査は636㎡、第19次調査は794㎡と、いずれも調査対象面積が1,000㎡以下と小規模であったため、全面表土除去による上層確認調査を実施した。検出された遺構は、種別を表す

略号と001から始まる3桁の数字を付けた。今回検出した遺構は、(17)土坑 = SK、(17)・(18)溝状遺構 = SDの略号をそれぞれ付して記録した。しかし、第18・19次調査で検出した古墳の周溝については、出口遺跡第1次~第16次の調査成果を整理・報告した際に使用したD01号墳・D02号墳…の呼称を踏襲した。そのため、(18)の周溝は隣接地で記録保存した周溝と同一であることが判明した時点でD03号墳と、(19)の周溝は新規の古墳と判明した時点でD15号墳の遺構番号を付した。

下層については、過去の調査では周辺部の石器ブロックの分布がやや薄いため、上層遺構調査終了後に対象面積に対し、まず約2%の割合で2m×2mのグリッドを設定して立川ローム最下層まで掘削し遺物の有無を確認した。その結果、遺物が出土しなかったため、調査を終了した。

小屋ノ内遺跡(17)~(19) (第4図)

第17次調査は526㎡、第18次調査は636㎡、第19次調査は80㎡といずれも小規模であり、小屋ノ内遺跡のほぼ中央部に位置する。出口遺跡第17次~19次調査同様、調査対象面積が1,000㎡以下と小規模であったため、いずれも全面表土除去による上層確認調査を実施した。調査時の遺構番号は、遺物の注記までそのまま踏襲したが、以降の整理時には、小屋ノ内遺跡の既調査の遺構番号の続き番号として、次のように変更した。(17A)SK-001→SK-665、(17A)・(17B)SD-001→SD-021、(17C)・(18)SD-002→SD-082、(17C)・(18)SD-003→SD-083、(19)SB-001→SB-154、(19)SB-002→SB-155、(19)SK-001→SK-666。なお、(19)SI-122・(19)SX-019は調査時に既に続き番号を踏襲した番号であったため、変更していない。

下層については、周辺で石器ブロックが散在するように分布しているため、上層遺構調査終了後に約4%でグリッドを設定し、立川ローム最下層まで掘削し遺物の有無を確認した。その結果、第18次調査区の成果として旧石器時代石器が1点確認され、周囲を拡張したがそれ以上の出土はなかったとして発掘完了届等に報告されたが、整理時の観察の結果、自然石であることを確認した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 周辺の地形(第1・6図, 図版1)

現在の利根川下流域は、近世初頭まで香取海といわれる内海と湿地帯であった。内海の名残が現在もこの地域に点在する大小の湖沼であり、千葉県においては印旛沼がその最大のものとなる。四街道市域は、北進して印旛沼西部に流れ込む手繰川と、やはり北進して印旛沼中央部に流れ込む鹿島川に合流する支流小名木川の源流部に位置し、市域の北東端部に当たる物井地区は、鹿島川へ注ぐ小名木川をはじめとする鹿島川支流により樹枝状に開析され、東側が鹿島川の谷津、北部は南西-北東方向の長さ1.2kmほどの小谷津、南部は東西方向の長さ1.0kmほどの谷津によって囲まれた、北東-南西方向約1.5km・北西-南東方向約0.7kmの範囲と2つの小谷津の基部周辺である。

その中で、出口遺跡は基部から西側に位置し、両水系の谷津田へ最も遠い位置になる。そのため、集落立地としては不適当だったようであり、出口遺跡の過去の調査では明確な住居跡は1軒も検出されていない。一方、小屋ノ内遺跡は基部の東側に位置し、南北に谷津が入り込む地点で、主に奈良・平安時代の集落が形成されている。

2 周辺の遺跡(第1・2図, 第1表)

第1図は、物井地区の周辺南北約2.5km、東西約2km四方の範囲について、本報告書の出口遺跡・小屋ノ内遺跡で検出された主な遺構である。古墳及び古墳時代後期主体集落及び奈良・平安時代主体集落の遺跡の分布である²⁾。発掘調査が実施されていない地区は表面採集遺物から推測されているため、土師器小破片からでは古墳時代～平安時代の中の詳細は不明な遺跡もあるが、多くが奈良・平安時代の遺跡である。また、第2図は、都市再生機構の物井地区土地区画整理事業範囲にかかる遺跡範囲であり、埋蔵文化財分布地図で把握されている県・四街道市の遺跡名や範囲と異なる部分があり、さらに古墳群としては複数の遺跡を含む。出口遺跡では、表土内採集遺物であるが、旧石器が発見されているので、以下に、周辺の旧石器時代、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世遺跡の様相を記す。

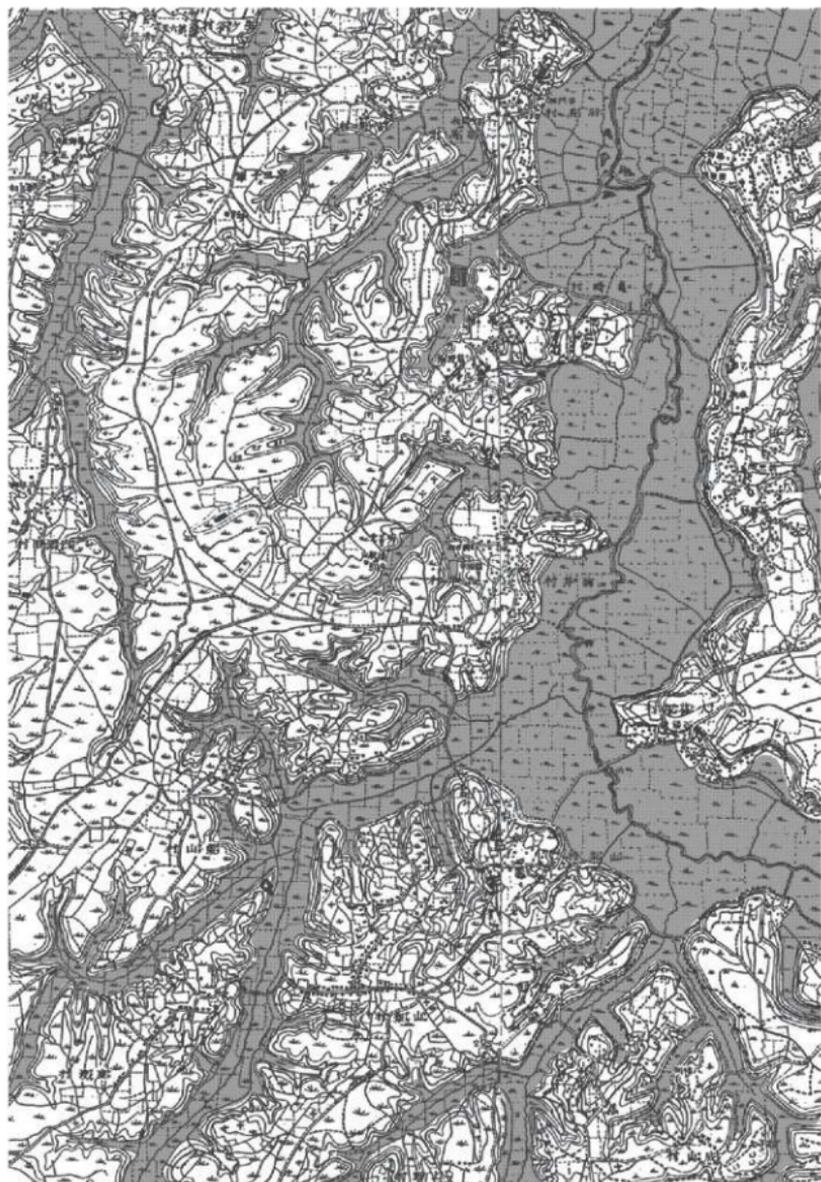
旧石器時代(第9・16図)

出口遺跡では、南西部の小支谷でV層～VI層、南部の小支谷の奥の東側に位置する地区でⅦ層～Ⅸ層、Ⅳ層～V層、Ⅱc層～Ⅲ層上部のブロックが集中し、台地中央部では小規模なブロックが点在して検出されている。また、小屋ノ内遺跡の南部では、小支谷に開口するⅨ層の馬蹄形ブロック群が検出され、台地中央部ではブロックが散在的に検出されている。物井地区の旧石器時代石器群の特徴は、①下野-北総回廊北縁部～奥羽山地の石材と、房総半島南部の石材とが交叉するエリアであったこと、②旧石器時代前半期には、環状・馬蹄形ブロック群をはじめ、繰り返し地域集団の集合キャンプが設営される地理的な位置を占めていたこと、という2点に要約される³⁾。

古墳時代後期(第1・2・7・23図)

物井地区では、北部の谷津の北西側に御山古墳群(御山遺跡内)(4)、南北の小谷津が近づく台地基部に物井古墳群(清水遺跡、新久遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡)(3)やその東側に散在する古墳(小屋ノ内遺跡(38)、稲荷塚遺跡(39))、その西の手繰川支流の谷津と間の千代田古墳群(5)・池花古墳群(6)が存在する。これらは、西側の手繰川東岸の支流と小名木川北岸の支流に挟まれた分水嶺付近に分布する。

御山古墳群では円墳7基・方墳4基が調査された。円墳は南群3基と北群4基の2群に分かれる。主体



第6図 明治時代物井地区周辺地形図 (1/25,000)
(第1図之ほぼ同範囲)

部は、南西側のうち2基は裾部に箱式石棺が検出され、北東側は石棺が検出されず、1基は墳頂直下の墳丘内に主体部を設けていた可能性が高い。北群は6世紀後半～末にかけて、南群は6世紀末～7世紀初頭頃に形成されたと想定される。方墳の主体部は、2基は箱式石棺、1基は横口式木槨を墳丘裾の地山内に設けており、変則的古墳の伝統を受け継いでいる。7世紀中葉～後葉に築かれたものである。副葬品では、円墳SX-015で出土した金銅装頭椎大刀が目目される。

物井古墳群は6世紀中葉～8世紀初頭に営まれたもので、既知の古墳は40基を数える。既報告分では、中小規模のⅠ：前方後円墳（2基）、Ⅱ：帆立貝古墳（6基）、Ⅲ：Ⅱに準ずる墳形で陸橋部（ブリッジ）に主体部（5基）、Ⅳ：陸橋部の反対側に主体部（4基か）、Ⅴ：単純円墳（8基か）に⁴⁾。墳丘直径は、1尺22.9cm・1歩1.37mとして、A：18歩（24.7m・8基か）、B：15歩（20.6m・14基か）、C：12歩（16.4m・5基か）、D：9歩（12.3m・4基か）に分類される⁵⁾。主な埋葬施設は箱式石棺と木棺の2種であり、その多くが墳裾部の地山を掘り込んだ墓坑内に設けられるいわゆる変則的古墳に属し、後から追加されたとみられる周溝内土坑も多数検出されている。墳丘の地山内に主体部が検出されない円墳も数基あり、墳丘封土内に主体部が設けられていたようである。円墳の1基S08号墳からは下総型埴輪が多量に出土し、旧印旛郡域では最南部の出土例である⁶⁾。また、副葬品は、直刀・刀子・鉄鏃・耳環・玉類であり、清水遺跡のS11号墳（物井1号墳）出土の金銅装頭把頭刀が目目される。

一方、該期の集落は古墳群内にはほとんど見つかっておらず、東側の鹿島川本流及び小名木川の谷津に近い場所に営まれている。小屋ノ内遺跡から6世紀後葉～7世紀の竪穴住居跡11軒、稲荷塚遺跡から7世紀代が主体の竪穴住居跡11軒、館ノ山遺跡から6世紀末～7世紀後葉の竪穴住居跡46軒、郷遺跡から7世紀前半～中葉の竪穴住居跡が5軒、北ノ作遺跡から7世紀中葉の竪穴住居跡が3軒、嶋越遺跡から7世紀後葉の竪穴住居跡が2軒検出された。地区外では、館ノ山遺跡の対岸の台地上に位置する入ノ台第2遺跡（8）⁷⁾から80軒の竪穴住居跡が検出されている。なお、小屋ノ内遺跡では、遺跡の南側を中心に6世紀前半の円墳6基、稲荷塚遺跡からは円墳2基が検出されているが、古墳時代集落とは離れている。該期の集落立地にあたり前代の墓域を敬遠したものと考えられる。また鹿島川水系と手繰川水系の分水界にあたる地形も集落がみられない理由の一つであろう。しかし、清水遺跡から西方に位置する千代田遺跡Ⅰ区では該期の集落が検出された。千代田遺跡でも古墳が築造されているが、詳細な様相は不明瞭である⁸⁾。千代田遺跡は、手繰川によって開析された支谷に近いことが、集落立地の理由と考えられる。

周辺部でも、亀崎の鍛冶内遺跡等の古墳群（7）と内山遺跡（33）・池下遺跡（34）等の集落、山梨の西向井遺跡（12）・相ノ谷遺跡（13）⁹⁾等の古墳群と今宿台遺跡等（37）の集落が、それぞれ関係することが推測できる。調査された遺跡では、山梨の谷津を挟んだ南東側の台地上で、郷野遺跡¹⁰⁾・権現堂遺跡¹¹⁾、鹿島川を挟んだ東側台地上の太田・大篠塚遺跡（75）¹²⁾で集落跡が検出されている。鹿島川と小名木川との合流地点北側から印旛沼までの鹿島川下流域では、北東3kmで六崎大崎台遺跡¹³⁾、北方5.5kmで江原台遺跡¹⁴⁾で集落跡が検出されている。鹿島川上流域では、東南東6.5kmで、工業団地造成に伴い岩宮遺跡群（南広遺跡・立山遺跡など）が大規模に調査されている。集落跡と古墳群があり、両者を共有する遺跡もある¹⁵⁾。

奈良・平安時代（第1・2・8・23図）

奈良・平安時代の集落は、古墳時代後期集落と古墳との間のゾーンともいうべき、小屋ノ内遺跡・稲荷塚遺跡等に主体がある。これらは、『和抄抄』に記載される「下総国千葉郡物部郷」に属する集落と考えられている。その中核遺跡は規格的な掘立柱建物配列をもつ小屋ノ内遺跡であり、竪穴住居跡の分布密度

も高い。時期は、8世紀～10世紀で、8世紀後半～9世紀前半がピークである。遺物は、文字・記号資料が多く、四街道市調査分も含めて344点あり、墨書191、線刻57、ヘラ書き88点である。墨書については、1文字は「大」「与」「万」「加」「吉」「生」「丈」「木」ほか、2文字は「天万」「津道」「雲司」「山梨」等がある¹⁶⁾。物部郷の主要な集落は小屋ノ内遺跡から東方に展開しており、稲荷塚遺跡・馬場No1遺跡¹⁷⁾・郷遺跡・古屋城跡・北ノ作遺跡・館ノ山遺跡・嶋越遺跡・入ノ台遺跡¹⁸⁾などが列挙できる。また古屋城跡・北ノ作遺跡に隣接する松葉作遺跡(40)でも該期の集落の存在が予想される。

物井から南方については、地名は四街道市長岡・山梨となるが、山梨は「千葉郡山梨郷」の遺称地と考えられている。物井と山梨の間には鹿島川の支流である小名木川が存在し、その支谷は比較的幅が広い。物部郷と山梨郷の郷境は小名木川と思われる。ただし、小名木川上流部では境が不明瞭である。入ノ台遺跡が位置する四街道市長岡は小名木川下流北方であり、物部郷の範囲内と考えられる。

中・近世

鹿島川流域には、谷津を見下ろす台地先端部に中世城館跡が多く分布する。中世の四街道市周辺は白井庄と呼ばれた地域に含まれており、千葉氏一族の白井氏一族である山無(山梨)・鹿渡・小名(小名木)など現在も残る地名を名字とした在地小領主が分布していたと考えられている。15世紀前半の鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏の対立による関東騒乱は、1455年千葉家内乱にも及び千葉城を攻めて宗家が馬加系に代わり、1479年には扇谷上杉氏家宰太田道灌と武蔵千葉氏により白井城が落城となる。白井氏は復帰したものの、16世紀半ばには千葉氏重臣原氏が入城したようである。また、物井には、15世紀後半には「物井殿」と呼ばれた千葉孝胤(1443年～1505年)の三男の右馬助がいたことが江戸時代の記録に伝えられており¹⁹⁾、白井氏系の諸城が千葉氏に取り込まれていったことが推測されている。千葉宗家は15世紀末には本佐倉城(酒々井町)を本城とする。16世紀前葉には、古河公方足利高基・千葉氏と小弓公方足利義明・里見氏・真里谷武田氏の対立の中で、1520年頃里見氏が下総北部に進入した際に中継基地として麻(和良比)城を使用したことが推測されている²⁰⁾。1538年の第一次国府台合戦を経て、千葉氏は当時房総に進出してきた後北条氏の配下となり、原氏は白井・生実両城を本城とした。1561年には里見氏が上杉謙信の関東進出に連動して下総国方面を攻撃したが、1564年の第二次国府台合戦では後北条氏が里見氏を破り、1566年には今度は上杉謙信や里見氏方が白井城を囲む等、戦乱は1590年の豊臣方による後北条氏本城小田原落城まで続いた。物井地域の中世城館跡の館ノ山遺跡・古屋城跡・北ノ作遺跡はいずれも発掘調査が実施されて、15世紀～16世紀の城館の機能変化等を伝える好資料である²¹⁾。

鹿島川及びそれによって形成された谷津は、印旛沼と里見氏領有の上総国に近い現在の千葉市東部を、同時に白井城と生実城という原氏の両本城をつなぐものでもあり、生産基盤や交通の上でも重要な流域であったと推測される。近世には、佐倉藩が佐倉城を本拠としたため、物井地区は下総地域の中心佐倉に直接する農村として繁栄した。

以上のように、物井地区周辺は豊かな鹿島川水系がもたらす生産基盤と交通路をもとに、原始時代から多くの遺跡が形成され、文化や地域勢力などの融合、対立が繰り返されてきたと思われる。

注1 物井地区の既刊及び本年度刊行予定の発掘調査報告書は以下のとおりである。

- ① 渡辺修一・矢本節朗 1994「四街道市御山遺跡(1) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書I-」(財)千葉県文化財センター(以降2005年度まで同財団)
 - ② 岡田誠造 1999「四街道市出口・鐘塚遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書II-」
 - ③ 古内茂ほか 2005「四街道市小屋ノ内遺跡(1) 旧石器時代編-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書III-」
 - ④ 糸川道行・大内千年・田中裕・渡邊高弘ほか 2006「四街道市小屋ノ内遺跡(2) 縄文時代~中・近世編 -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IV-」(財)千葉県教育振興財団(以降、2011年度まで同財団)
 - ⑤ 糸川道行・古内茂・渡邊高弘 2007「四街道市小屋ノ内遺跡(3) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書V-」
 - ⑥ 沼澤豊 2008「四街道市郷遺跡・中久喜遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VI-」
 - ⑦ 岸本雅人・古内茂・糸川道行・西野雅人 2009「四街道市稲荷塚遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VII-」
 - ⑧ 沼澤豊 2009「四街道市清水遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VIII-」
 - ⑨ 糸川道行・小林信一・西野雅人・落合章雄ほか 2011「四街道市館ノ山遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IX-」
 - ⑩ 沼澤豊・嶋田浩司 2011「四街道市新久遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書X-」
 - ⑪ 落合章雄 2011「四街道市清水遺跡・新久遺跡 旧石器時代編-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XI-」
 - ⑫ 糸川道行・沼澤豊ほか 2012「四街道市出口遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書II-」
 - ⑬ 田井知二・嶋田浩司・黒沢崇・大岩桂子ほか 2013「四街道市北ノ作遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XIII-」(公財)千葉県教育振興財団(以降同財団)
 - ⑭ 野口行雄 2013「四街道市出口遺跡 旧石器時代編-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XIV-」
 - ⑮ 藤澤一・山口典子ほか 2013「四街道市館ノ山遺跡(2) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XV-」
 - ⑯ 山田貴久・大岩桂子・沼澤豊ほか 2013「四街道市御山遺跡(2) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XVI-」
 - ⑰ 大岩桂子 2014「四街道市嶋越遺跡(1) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XVII-」
 - ⑱ 田村隆 2015「四街道市出口・鐘塚(2)・(3)・(4)遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XVIII-」
 - ⑲ 糸川道之・本原高弘 2016「四街道市清水遺跡(3) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XIX-」
 - ⑳ 池田大助・宮重行 2016「四街道市嶋越遺跡(2) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XX-」
 - ㉑ 池田大助 2016「四街道市高瀬遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXI-」
 - ㉒ 田村隆・木原高弘・香取正彦ほか 2016「四街道市館ノ山遺跡(3) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXII-」
 - ㉓ 木原高弘・香取正彦ほか 2016「四街道市古屋城跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXIII-」
 - ㉔ 池田大助 2016「四街道市棒山・呼戸遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXIV-」(予定)
 - ㉕ 井上哲朗 2016「四街道市出口遺跡(3)・小屋ノ内遺跡(4) -物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXV-」(本書)
- 2 (財)千葉県教育委員会 1999「千葉県埋蔵文化財分布地図(2) -東葛飾・印旛地区- (改訂版)」
- 3 注1②の田村隆ほか2016
 - 4 渡辺修一 1994「四街道市内黒田遺跡群」(財)千葉県文化財センター ほか
 - 5 沼澤豊 2010「中小古墳における形態と規模の企画性」『研究連絡誌』第71号 (財)千葉県教育振興財団ほか
 - 6 注1③の沼澤豊2012
 - 7 新井和之・中西克也ほか 1990「千葉県四街道市入ノ台第2遺跡発掘調査報告書」四街道市教育委員会
 - 8 米内邦雄ほか 1972「千代田遺跡-千葉県印旛郡四街道町-」四街道千代田遺跡調査会
 - 9 新井和之ほか 1982「北総線-東京電力北総線設置工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-」東京電力北総線調査会
- では、鉄塔建設予定地という狭い面積の調査で弥生時代中期と古墳時代集落が検出されているが、分布地図(注2)の遺跡範囲全体には古墳群や中世城館跡が存在する。

- 10 飯島伸一 2002『千葉県四街道市郷野道跡－四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)－』(財)印旛郡市文化財センター
- 11 高橋誠・佐藤見雅ほか 2004『千葉県四街道市権現堂道跡－四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)－』(財)印旛郡市文化財センター
- 12 田川良ほか 1978「太田・大塚塚－千葉県佐倉市太田・大塚塚道跡発掘調査概報－」日本文化財研究所
- 13 米内邦雄 1973『大崎台道跡』大崎台道跡発掘調査団
 柿沼修平・中西克也ほか 1984『大崎台道跡発掘調査概報－大崎台道跡B地区・C地区－』佐倉市大崎台B地区道跡調査会
 柿沼修平・中西克也ほか 1985～1987『大崎台道跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅲ』佐倉市大崎台B地区道跡調査会
 柿沼修平 1997・1998『大崎台道跡発掘調査報告Ⅳ・Ⅴ』佐倉市教育委員会
- 14 高田博ほか 1977『佐倉市江原台道跡発掘調査報告書Ⅰ 第1次・第2次調査』(財)千葉県文化財センター
 高田博ほか 1980・1981『佐倉市江原台道跡発掘調査報告書Ⅱ・Ⅲ』(財)千葉県文化財センター ほか
- 15 以下の(財)千葉県文化財センター調査報告書
 金丸誠ほか 1983『佐倉市立山道跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』
 森本和男・金丸誠ほか 1993『佐倉市南広道跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』ほか
- 16 注14と同書。
- 17 加藤有花 2007『千葉県四街道市馬場No1道跡－物井の里宅地造成地内埋蔵文化財調査－』(財)印旛郡市文化財センター
- 18 注7と同書。
- 19 『千葉実録』『妙見実録千葉記』等『改訂房総叢書』第二輯(1959年)
- 20 荒井嗣・齊藤毅ほか 1991『千葉県四街道市和良比道跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－四街道市和良比地区埋蔵文化財調査－』(財)印旛郡市文化財センター
- 21 発掘調査報告書の他、井上哲朗 1998『鹿島川流域における戦国前期城館の一形態－四街道市北ノ作道跡の調査から－』『研究連絡誌』第53号 (財)千葉県文化財センター、同 2011『房総における城館跡出土の貿易陶磁－国産陶器との供伴関係を中心に－』『貿易陶磁研究』第31号 日本貿易陶磁研究会 等を参照された。



第7図 物井古墳群古墳分布状況図



第8図 小屋ノ内遺跡及び周辺遺構全体図

第2章 出口遺跡(17)～(19)

第1節 調査結果概要(第9・10図)

本章では、出口遺跡の平成23年度の第17次調査及び平成25年度の第18・19次調査で検出した遺構・遺物を報告する。第17次調査区は当遺跡東端近く、第18次調査区は中央部北端部、第19次調査区は西端部近くである。対象面積計1,606㎡のうち、上層本調査実施面積が計919㎡で、検出した遺構は縄文時代陥穴1基(17)、古墳周溝2基(18)・(19)、中・近世溝1条(17)・道路跡1条(18)であった。下層については、4m×4mのグリッドを基本として41㎡の確認調査を実施したが、遺物は検出されなかった。以下上層検出の各遺構・遺物について、その内容を記述する。なお、各遺構に付した()内の数字は調査次を表わす。

出土遺物は、遺構内・外を含め全体でごく僅かであった。遺構内からの出土は、第1節で記したように、小破片が3点のみで図化できる遺物は出土していない。遺構外で検出した遺物は、今回図化しなかった縄文土器の小破片1点を含め総数3点であった。

第2節 旧石器時代(第9・15図, 図版2・12)

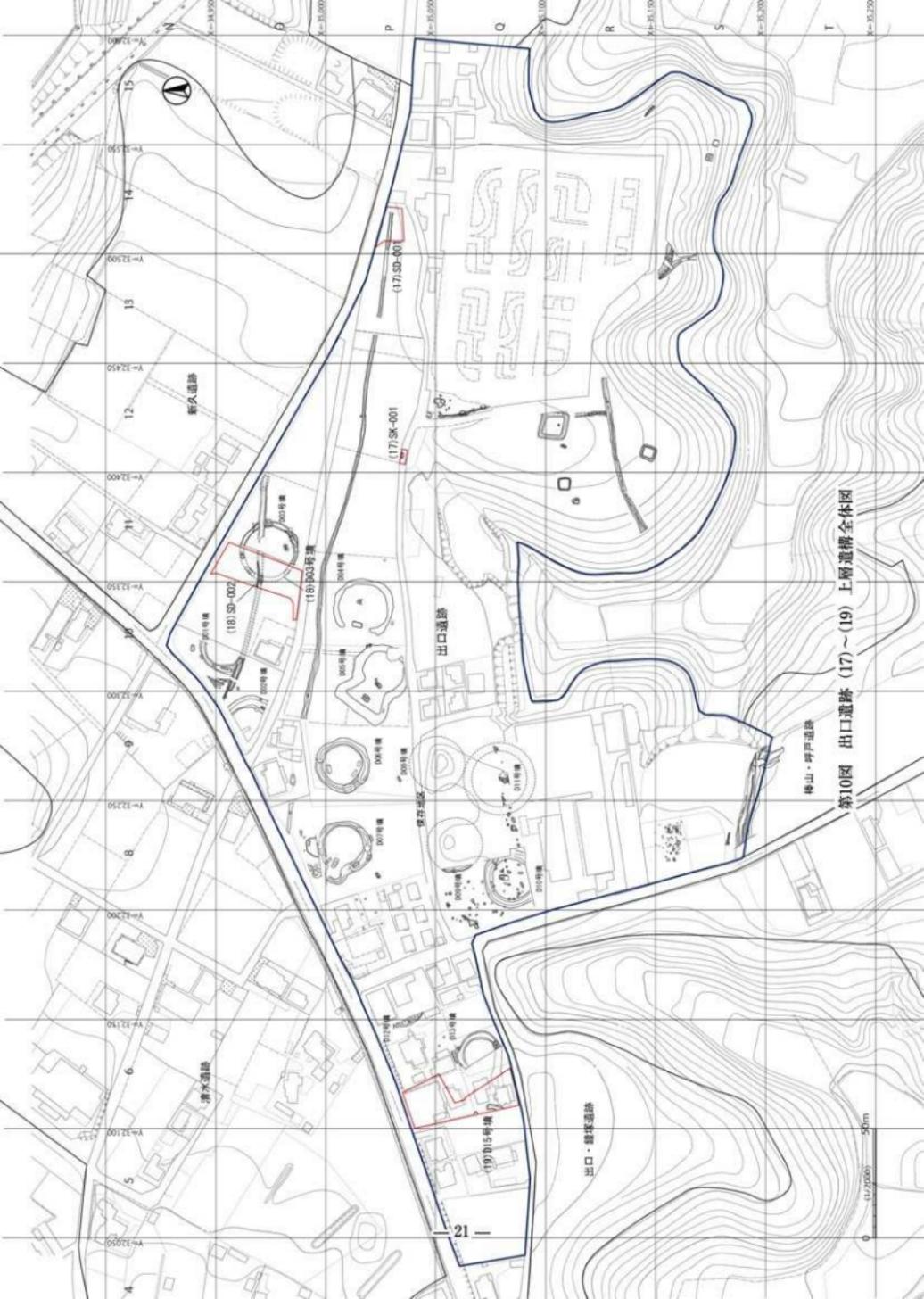
下層については、過去の調査で周辺部には石器ブロックの分布がやや薄いため、上層遺構調査終了後に対象面積に対しとりあえず約2%の割合で2m×2mのグリッドを設定し、41㎡(約18%)について立川ローム最下層まで掘削し遺物の有無を確認した。その結果、遺物を出土しなかったため、さらなる確認調査(+2%)を経ずに終了した。

第15図1は旧石器時代の石器で、第18次調査区の遺構等確認面(100-49グリッド)で採集した。黒色安山岩製の両面加工尖頭器である。黒色安山岩は褐色に風化しているが、斑晶は微細である。片面の先頭部から面取り加工が施されている。面取りは長さ15mm程度と短い、側縁部の一部を切り取っている。平面形はほぼ左右対称で、最大幅が器体中央付近になるように調整されている。しかし、断面形態を見ると、両端では紡錘形に近いが、最大幅付近では平行四辺形になる。これは素材の剥片が板状であったことに起因すると考えられる。整形剥離の特徴として、末端羽状の平坦な剥離面(a)と、末端ステップで、やや角度のある剥離面(b)とが両面中央部稜線において切り合うことである。剥離面bを打面として剥離面aが形成されていく過程が観察される。側縁は図からわかるように、ややジグザグとなる。いわゆる男女倉型尖頭器の仲間、物井地区では出口・鐘塚遺跡集中21に黒色安山岩製のものがある。同種の石器は、相模野ではL2～B1層から出土している。この層準には石刃や剥片素材の各種尖頭器が共存しており、狩猟具の機能分化が促進された時期である。本資料の最大長は42.7mm・最大幅は16.4mm・最大厚は6.9mmであり、重量は5.1gである。

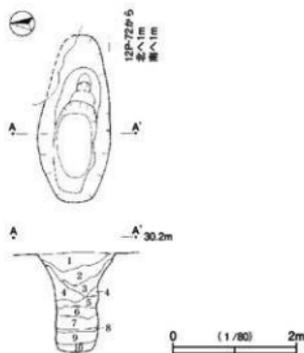
第3節 縄文時代

(17)SK-001 (第11図, 図版2)

平成23年度の調査で検出した。主軸は東西方向、平面形は長楕円形である。長さ28m、幅0.8m～1.2m、深さは検出面から1.6mである。検出面からやや傾斜をもって掘り込まれるが、約2/3から下半はほぼ垂直



第10図 出口通路 (17)~(19) 上層避難全体図



(17)SK-001

1. 暗褐色土 ローム土・ローム粒少量、粘質・しまりあり
2. 暗褐色土 ローム土・ローム粒多量、粘質・しまりあり
3. 暗褐色土 ソフトローム土状、褐色土・ロームブロック少量、粘質、しまりあり
4. 暗褐色土 ロームブロック土状、ソフトローム多量、粘質・しまり強
5. 灰色土 ロームブロック・ローム土・褐色土少量、粘質・しまりあり
6. 暗褐色土 ロームブロック土状、ソフトローム多、灰色土・ローム粒少量
7. 暗褐色土 ロームブロック土状、ローム土多、灰色土少量、粘質・しまり強
8. 暗褐色土 ロームブロック・灰色土の混成土、粘質・しまり強
9. 暗褐色土 ロームブロック土状、7層に類似、粘質・しまり強
10. 灰色土 ロームブロック多、ローム土少量、粘質・しまり強

第11図 (17) SK-001

に掘り込まれている。東側壁は階段状に段差を有する。底面はほぼ平坦で、底面幅は0.7m程である。覆土は、下層はどロームブロックの多い明黄褐色～暗褐色土で、出土遺物はない。形状や覆土から縄文時代の陥穴で間違いなからう。

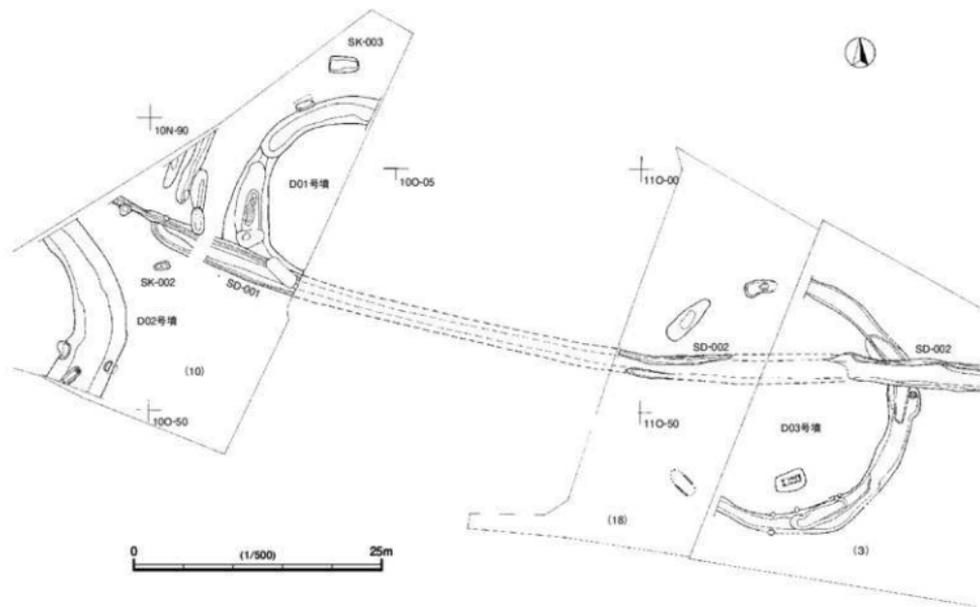
第4節 古墳時代

(18)D03号墳(第12・13・15図、図版3)

出口遺跡の古墳群の最も東に位置する、平成5年度に第3次調査で検出された古墳(D03号墳、旧遺構番号③SX-003)¹⁾の西側隣接地で検出した。位置関係から同一古墳と判断したため、当初からD03号墳の一部として調査した。

東側の調査では、墳丘は既に削平され残存はなく、墳丘直径は周溝上端で計測して22.5m、下端で23.5m程であった。周溝の幅は1.5m～2.5m、深さは0.1m～0.3mで、深くなる部分が2箇所あったが、明瞭な落ち込みではなく周溝内土坑の可能性は低いとされている。主体部は墳丘部の南側に箱式石棺が南側周溝に平行させる向きで検出された。墓坑(石棺掘方)は長軸3.1m・最大幅2.0m、深さは検出面から最大0.8m、石棺は細雲母片岩で、床面での平面規模は、主軸長1.75m、幅は東側出入口部で0.6m、西側で0.5m、高さ0.5mであった。遺物は盗掘のため少量であったが、鉄製・青銅製耳環2組や刀子1点が出土した。

第18次調査区では、後世の掘削がハードローム面まで及んでいたため、掘り込み面がやや深かった周溝部分が3か所で見られ土坑状に検出されただけであった。いずれも検出面からの掘り込みが浅く、深い箇所でも30cm弱、浅い箇所では5cmにも満たない部分もあった。特に南側の周溝は、僅かに痕跡をとどめる程度の遺存状態であった。遺存状態が良好であれば、東側で調査した周溝の続きが検出された筈である。平成5年度調査の報告書では、清水遺跡の古墳の石棺方向事例から、その反対側(北部)に周溝を渡る陸橋部があった可能性が推測されている。しかしながら、今回の調査区はさらに削平が著しく、周溝が殆ど検出できなかったが、周溝内土坑が検出されていることから、陸橋部は存在しなかった可能性が高い。



第12図 18次調査区と隣接区

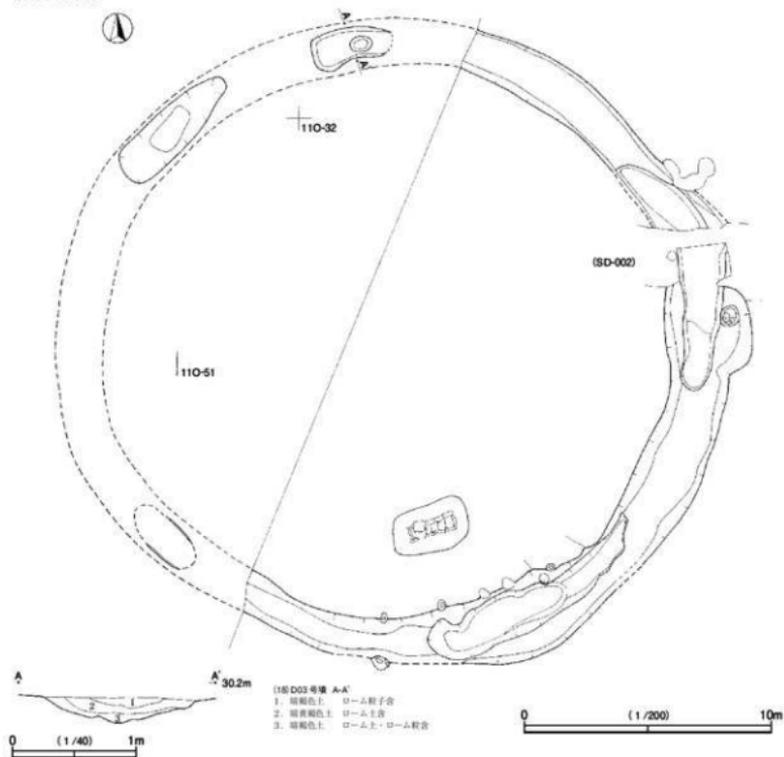
出土遺物は、遺構検出作業時に土師器甕の胴部小破片が2点出土したのみである。第15図2は土師器甕の口縁部破片で、(18)の遺構等検出作業時に見つかった表採遺物である。復元口径20.8cm。口縁部の内外面は横方向のナデを施し、肩部外面はヘラケズリのままで内面は横方向のナデを施している。胎土は比較的密で、赤褐色の明るい色調である。おそらくD03号墳に関連する遺物であろう。

物井古墳群の分類では、墳形Ⅳ類（ブリッジに主体部を持つ円墳）、主丘部直径B類（20.6m）とされていたが、墳形はⅤ類（単純円墳）の可能性がある。時期については、出口遺跡の古墳群の造営時期が6世紀後葉～7世紀初頭と推測されていることから、その内の後半として、西暦600年前後の造営と考えられる。(19)D15号墳（第13図、図版3）

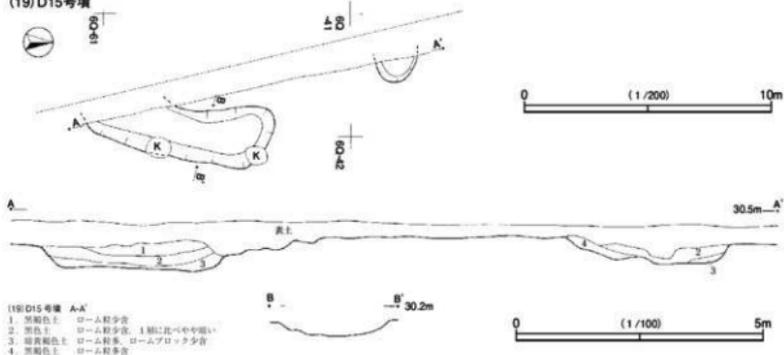
出口遺跡では最も西側の調査区で検出した古墳である。新発見の古墳であるため、通し番号のD15号墳とした。調査区の南西付近で周溝の一部を検出したが、大半は未調査区へ続いていくため全体の形状は把握できなかった。検出面からの掘り込みは15cm～20cm前後と概して浅く、底面に緩やかな凹凸がみられた。検出した2か所の周溝の間は5m程で、精査時の状況から掘り込みがなく、周溝のブリッジ部分に相当すると思われる。墳形はⅢ類またはⅣ類、墳丘直径は15m前後と推測されるのでC類と考えられる。

出土遺物は、周溝外から土師器甕の口縁部小破片が1点出土したのみである。

(18) D03号墳



(19) D15号墳



第13図 (18) D03号墳・(19) D15号墳

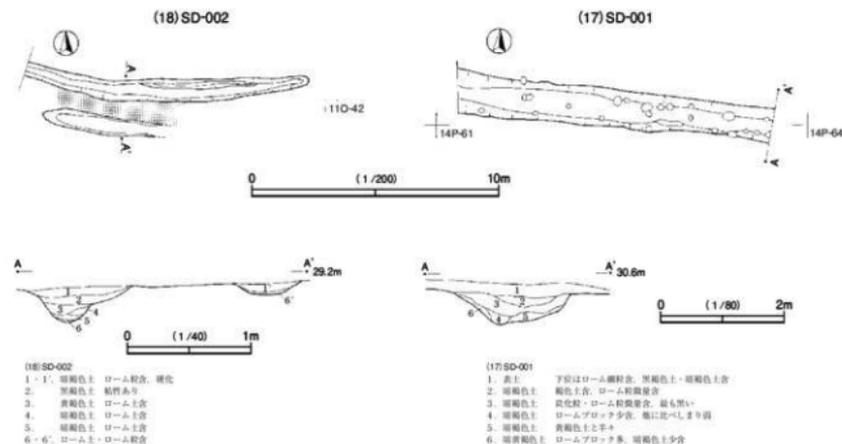
第5節 中・近世

(17)SD-001 (第14図, 図版2)

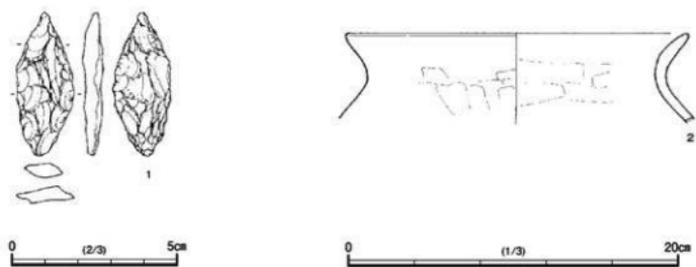
SD-001は、前回報告した第1次から第16次調査時で検出された溝²⁾の続きで、遺跡の北側をほぼ東西に横断する中で最東端部に位置する。調査区の中央付近を東西に直線的に延びており、延長13m・幅1.4m～1.8m・深さ20cm～40cmで、ピット状の掘り込みが多数みられた。これらのピットは、形状や覆土の状況から近世以降の攪乱と判断されたが、植栽痕の可能性も考えられる。遺物は出土しなかった。当溝は、今回の調査区の東側では確認されていないが、西側は県道136号線(佐倉停車場千代田線)を横断し、清水遺跡の溝024へ続くようである。

(18)SD-002 (第14図, 図版3)

SD-002は、検出した位置や形状から第3次調査区のD03号墳の周溝と重複した(3)SD-002につながると判断したため、前回と同一遺構名を付した。(18)D03号墳と同様後世の掘削により上部が削平されており、比較的掘り込みが深かった部分を検出した。平行する2条の溝で構成されており、調査区の中央付近を東西に延びている。また西側は、未調査区を横断して平成19年度に調査した(10)SD-001へ続くと考えられる。延長は北側の溝で約11m・幅0.8m～1.0m、深さは最も遺存状況の良い箇所ですら30cmで、底面は比較的凹凸が少なかった。南北溝の間の平坦部や北側溝の覆土中層にも硬化面が確認できた。遺物は出土しなかった。硬化面の存在から、道路として利用されたと考えられる。



第14図 (17)SD-001・(18)SD-002



第15図 出土遺物

注

1 沼澤豊ほか 2012「四街道市出口遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XII－」(財)千葉県教育振興財団

2 注1と同書。

第3章 小屋ノ内遺跡(17)～(19)

第1節 調査結果概要 (第16・17図)

本章では、小屋ノ内遺跡の平成26年度の第17・18次調査、平成27年度の第19次調査で検出した遺構・遺物を報告する。第17次調査は3箇所(526㎡)、第18次調査は1箇所(636㎡)、第19次調査は1箇所(80㎡)といずれも小規模であり、小屋ノ内遺跡のほぼ中央部に位置するが、大きく北部の(17A・B)の2箇所、南部の(17C)・(18)・(19)区に分けられる。対象面積計666㎡のうち全てが上層本調査となり、検出した遺構は、縄文時代炉穴1基(17)、奈良・平安時代堅穴住居跡1軒・掘立柱建物跡2棟・土坑1基(19)、中・近世方形周溝区画1基(19)・溝4条(17・18)であった。溝については、(17)と(18)で連続する溝が1条ある。下層については、計33㎡の確認調査を実施したが、遺物の出土はなかった。以下、各遺構についてその内容を記述する。なお、出口遺跡同様、各遺構に付く()内数字は調査次を表わす。

第2節 旧石器時代 (第16図、図版4)

下層については、周辺で石器ブロックが散在するように分布しているので、上層遺構調査終了後に約4%でグリッドを設定し、立川ルーム最下層まで掘削し遺物の有無を確認した。その結果、第18次調査地区の成果として、旧石器時代石器が1点確認され、周囲を拡張したがそれ以上の出土はなかったとして発掘完了届等に報告されたが、整理時に詳細に観察した結果、自然石であることを確認した。このため、第18次調査区の確認面積が9㎡/60㎡と15%となったが、第17～19次調査全体では33㎡/666㎡(4.9%)であった。

第3節 縄文時代 (第18図、第2・4表、図版4・12)

縄文時代の遺構は、炉穴とみられる土坑1基のみ検出された。

(17A)SK-665 (第18図、図版4)

17A区の南部、20Q-25グリッドで検出された長楕円形の土坑である。長軸1.6m・短軸0.65m・深さ0.15mで、南東端部底面には径58cmの範囲で焼土が堆積していた。

1～4は、SK-665覆土から出土したミニチュア土器の同一個体で、胎土に繊維を含み、表裏面とも貝殻条痕が付く。早期末の茅山式土器である。

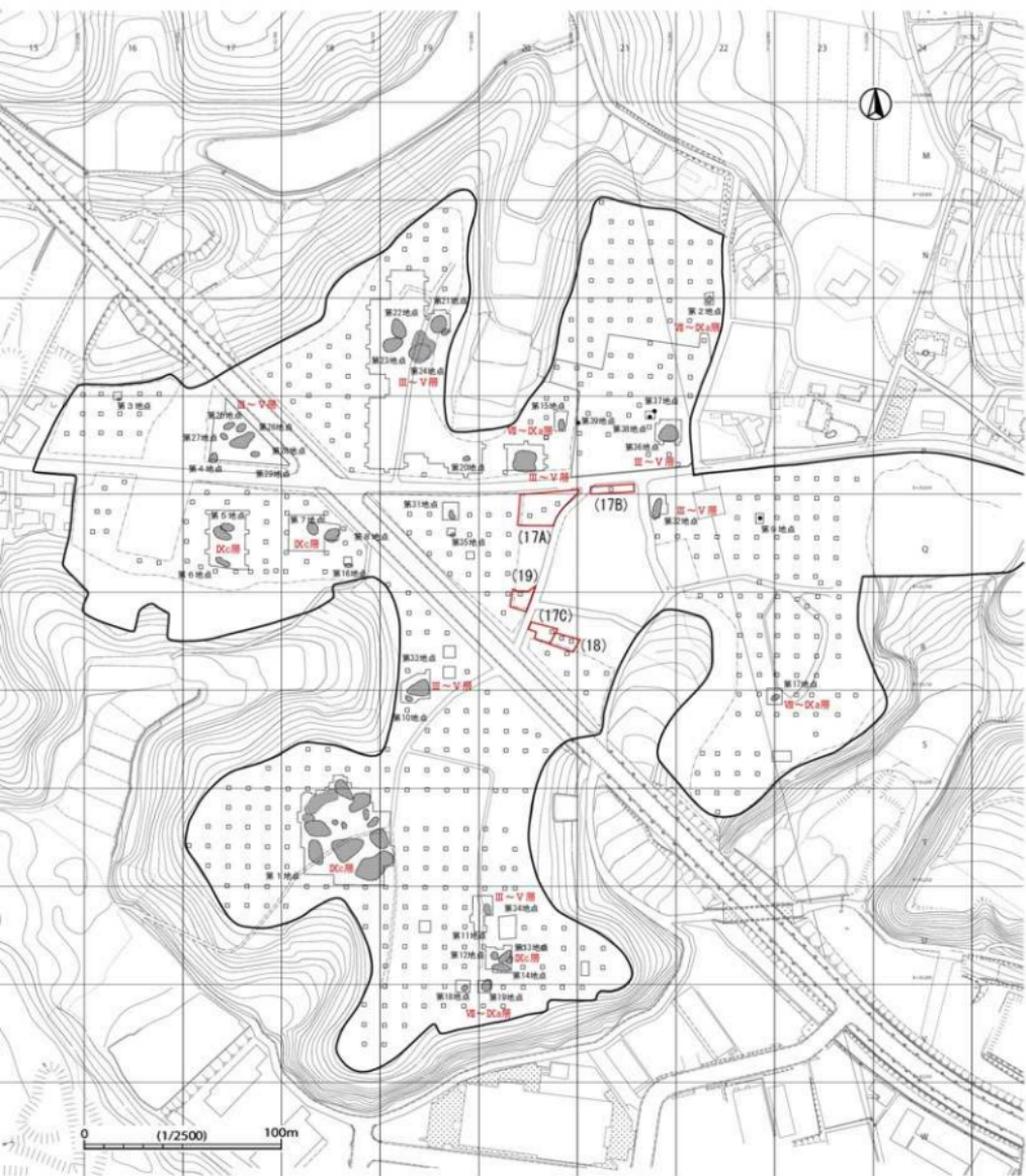
遺構の形状と出土遺物から、縄文時代早期の炉穴と考えられる。

遺構外出土遺物 (第18図、第2・4表、図版12)

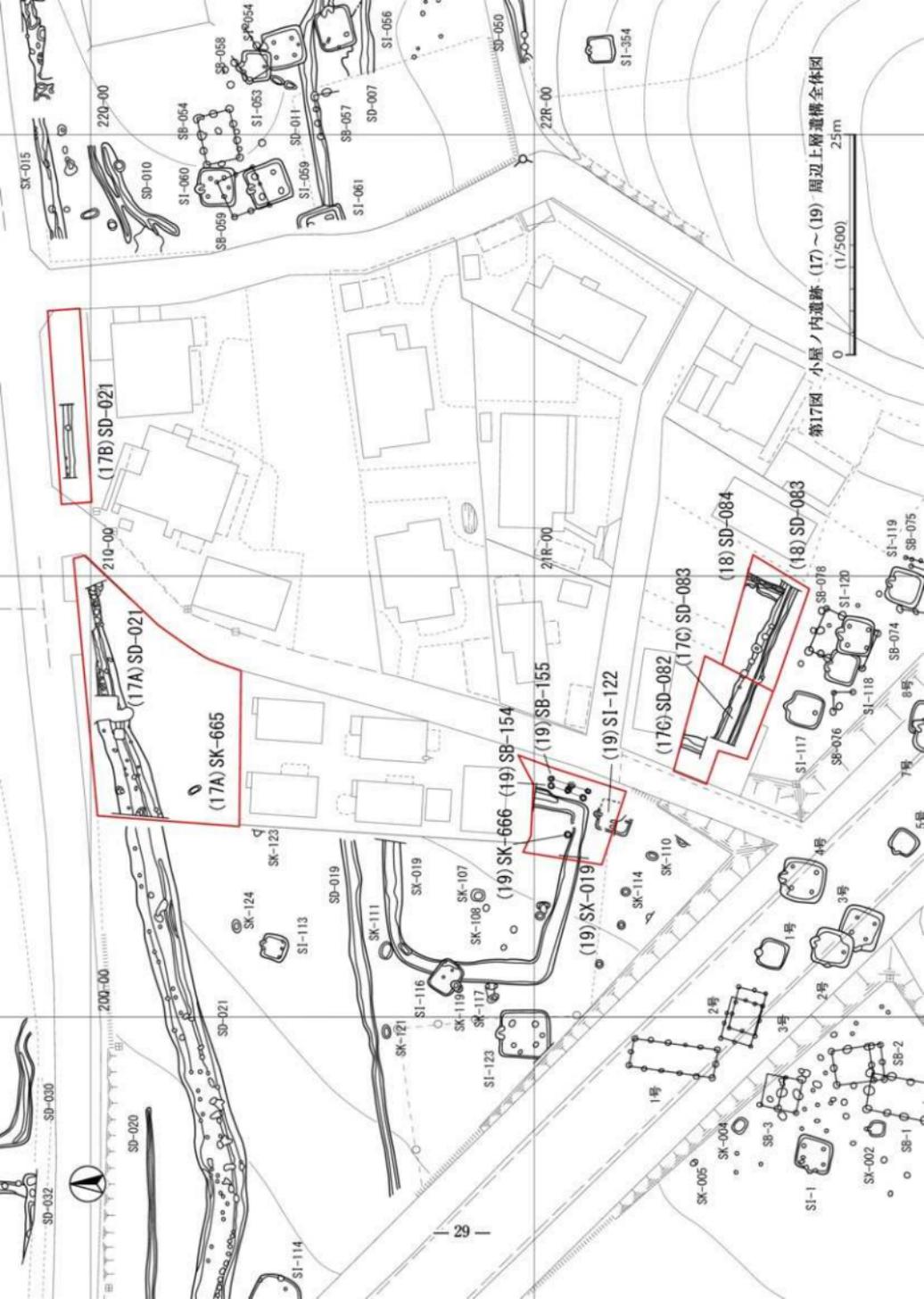
縄文時代の遺構はSK-665のみであるが、他の時期の遺構覆土や表土中からは、縄文土器が約1,400g出土している。特に第17次調査区で多く出土した。

5～7はSD-021覆土から出土した。5は櫛歯条線を施す。中期後半加曾利E式後半ないしは後期前半の堀之内I式土器であろう。6は口辺部に帯状文が施された土器で、後期末の安行I式土器である。7は肥厚した口縁部に刻みを施し、その下に条線が横走する。後期末から晩期初頭の安行式の粗製土器である。

調査区全体での縄文時代遺物は、約1,400gであり、その内、第17次調査区が1,160gと大半を占め、さらにSD-021覆土出土の土器が全体の60%以上である。



第16図 小屋ノ内遺跡下層調査全体図



第17図 小屋 / 内遺跡 (17)～(19) 周辺上層遺構全体図
0 25m
(1/500)

(17A) SK-665
210-00
(17A) SD-021

200-00
SD-020
SD-021
SK-124
SK-123
SI-113
SD-019
SK-111
SK-116
SK-117
SK-110
SK-107
SK-108
SK-123
SI-123
SK-121

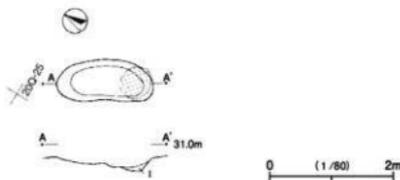
(17B) SD-021
210-00
(17C) SD-082
(19) SK-666 (19) SB-154
(19) SB-155
(19) SK-019
(19) SI-122

SK-114
SK-110
SK-004
SK-005
SB-3
SB-2
SK-002
SK-001
SK-003
SK-004
SK-005
SB-3
SB-2
SK-002
SK-001

(18) SD-084
(18) SD-083
SI-117
SB-016
SI-118
SI-119
SB-074
SB-075
SB-076
SB-077
SB-078
SB-079
SB-080
SB-081
SB-082
SB-083
SB-084
SB-085
SB-086
SB-087
SB-088
SB-089
SB-090
SB-091
SB-092
SB-093
SB-094
SB-095
SB-096
SB-097
SB-098
SB-099
SB-100

1号
2号
3号
4号
5号
6号
7号
8号
9号
10号
11号
12号
13号
14号
15号
16号
17号
18号
19号
20号
21号
22号
23号
24号
25号
26号
27号
28号
29号
30号
31号
32号
33号
34号
35号
36号
37号
38号
39号
40号
41号
42号
43号
44号
45号
46号
47号
48号
49号
50号
51号
52号
53号
54号
55号
56号
57号
58号
59号
60号
61号
62号
63号
64号
65号
66号
67号
68号
69号
70号
71号
72号
73号
74号
75号
76号
77号
78号
79号
80号
81号
82号
83号
84号
85号
86号
87号
88号
89号
90号
91号
92号
93号
94号
95号
96号
97号
98号
99号
100号

(17)SK-665

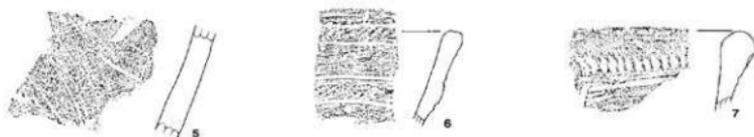


(17)SK665
1. 黄赤褐色土・ローム層・ロームブロック
+ 粘土層・粘土ブロック

(17)SK-665出土



(17)SD-021出土



第18図 縄文時代の遺構・遺物

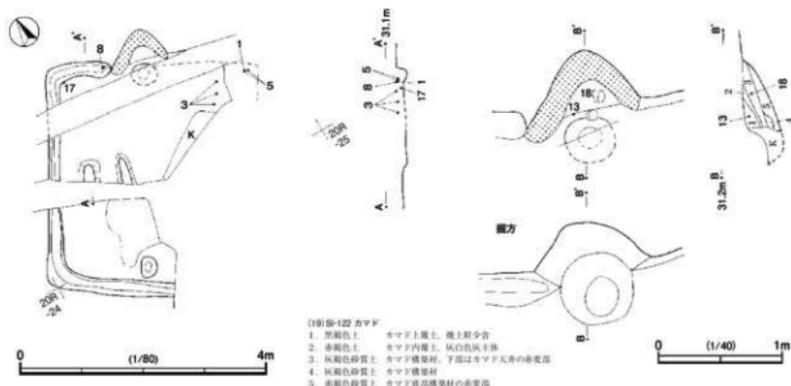
第4節 奈良・平安時代

小屋ノ内遺跡の主体は、奈良・平安時代の集落(第8図)であり、隣接区で一部検出された1軒の堅穴住居跡の連続部分、掘立柱建物跡2棟の一部、土坑1基が検出された。

1 堅穴住居跡

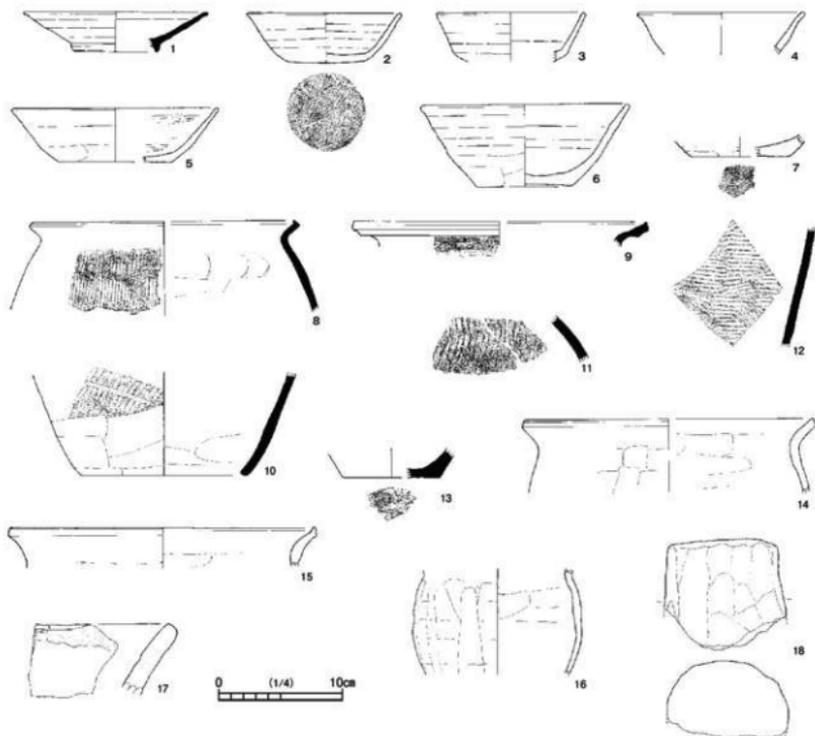
(19)SI-122(第19図、第2・4表、図版4・5)

第19次調査区で検出された堅穴住居跡で、平成3・4年度に南東部が一部検出された堅穴住居跡¹⁾の連続部分が検出された。調査区境であるため接続部に未掘部分があり、北側に攪乱も入るため、不明な部分があるが、全体規模は長軸3.8m・短軸推定3.4m、深さは残存状況が悪く0.1m程である。カマドは北東辺やや西寄りに位置し、主軸はN-33°Eである。床面の南西部には2条の盛り上がりがあるが、隣接調査区の床面には検出されておらず、仕切りのための施設或いは攪乱による可能性も考えられる。壁の内側の周溝は、西側では残存し、幅10cm程・深さ5cm程である。



(19) SI-122 カマツ

1. 赤褐色土
2. 赤褐色土 (赤マツ内層土, 灰白色灰土層)
3. 灰褐色砂質土 (カマツ構築材, 下部はカマツ天幕の赤変泥)
4. 灰褐色砂質土 (カマツ構築材)
5. 赤褐色砂質土 (カマツ構築部材の赤変泥)



第19図 (19) SI-122

カマドは、住居壁からの突出部分は幅80cm・長さ50cmである。カマド手前に攪乱が入り、袖部や火床部の残存状況も悪く、形状は不明瞭である。突出部壁に砂質粘土を貼り付けている。内部は、底にカマド構築材が被熱赤化した部分が厚さ10cm程あり、その上に覆土が20cm程堆積する。

遺物は、カマド内から須恵器甕底部13・支脚18、床面北東部から土師器杯2等が出土している。他、覆土中から出土した遺物についての詳細は第2表を参照されたいが、以下概要を記す。1は灰釉陶器高台付皿、2～5は土師器杯、6・7は土師器鉢、8・9・11～13は須恵器甕、10は須恵器瓶、14～16は土師器甕、17は土師器鉢である。

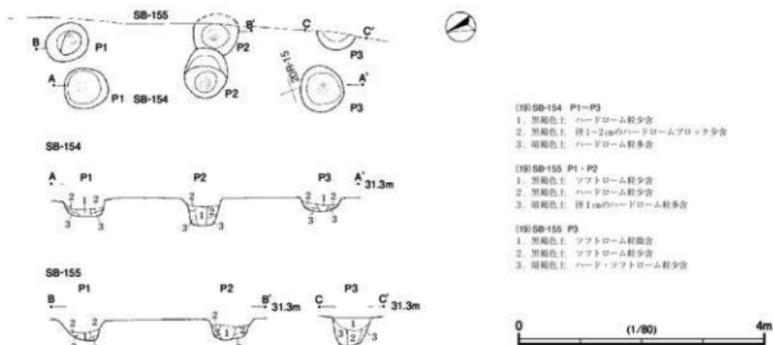
灰釉陶器皿1は、直線的に開き、胎土は緻密である。灰釉は観察できないので、元々一部の薄い釉が剥離した可能性もあろう。土師器杯は口径に比して器高が高く椀に近い形状であり、口辺部は若干反する。ロクロ成形で、底部は回転糸切りで2・5は手持ちヘラ削りである。土師器鉢の6の底部は手持ちヘラ削り、7は無調整である。甕は須恵器も土師器も頸部は断面が「く」の字状である。須恵器甕・瓶は8・9が褐色の千葉地域産（千葉市域および佐倉市・富里市の酸化焙焼成須恵器窯産）、10～13は灰色で、10・11は長石を多く含み常陸産の可能性がある。9の口縁部は折り返し口縁を呈する。土師器甕14・15は口縁部先端が若干つままれる程度のもので、器面調整は外面縦位、内面横位のヘラ削りである。17は土師器にしては堅質で、形状としては器台の可能性もあるが、口唇部に摩滅が見られないことから、鉢の一種と推測され、中・近世の土師質土器の可能性も考えられる。18の支脚は直径10cmほどである。

平成3年度調査区では、「吉」の墨書が書かれ、口縁部がやや反するロクロ成形土師器杯が2点出土している。19次調査区のSI-122全体では、縄文土器片15g、土師器片1,020g、須恵器片358g、土製品（支脚や粘土塊など）750g、中・近世土器片（鉢型土器17）98gである。以上、土師器・須恵器の様相から、過去の小屋ノ内遺跡の遺物の様相²⁾を比較して、時間的には9世紀前半葉～中葉の遺物群と考えられる。

平成3年度の調査では、第19次調査区の南側に径50m程の9世紀前半主体の集落が検出されており、その一角を成すものであろう。

2 掘立柱建物跡

第19次調査区の東寄りの境界付近で6基の柱穴が3基ずつ2列に検出された。各穴の直径はいずれも70cmほど、内部はローム粒を含む黒褐色土で固められ、中央部に径20cm前後の柱痕が存在した。柱間は1.9m～2.1mで掘立柱建物跡の一部であるが、列の間は80cm前後と狭いので、2棟の建物の一部の可能性が高く、SB-154とSB-155とした。西側に方形の周溝区画に沿っていることから、中・近世周溝に関係する建物或いは櫓列の可能性もあるが、櫓列であれば、掘方及び内部を強く固める必要もないこと、小屋ノ内遺跡内の他の掘立柱建物跡と規模等が一致していること、中・近世の掘立柱建物跡であれば通常抜き取り痕が残るがそれがないこと等から、古代の掘立柱建物跡の可能性が高いと思われる。小屋ノ内遺跡の掘立柱建物跡は、桁行×梁行が3間×2間が61軒、2間×2間が35軒、3間×3間が12軒検出されており³⁾、恐らく桁行3間×梁行2間の建物が2棟存在したことが考えられる。



第20図 (19) SB-154・155

(19)SB-154 (第20図・図版5)

P1～P3の直径は70cm程である。P2は掘削時の調整または抜き取りのため、長軸80cm程である。深さは、P1は28cm、P2は44cm、P3は25cmである。柱間は、P1～P2間228cm、P2～P3間200cmである。遺物は、縄文土器片が33g、土師器片が4g出土した。

(19)SB-155 (第20図、図版5)

P1～P3の直径は、SB-154同様70cm程である。深さは、P1は16cm、P2は32cm、P3は48cmである。柱間は、P1～P2間200cm、P2～P3間190cmである。遺物は、縄文土器片が16g、土師器片が1g出土した。

3 土坑

(19)SK-666 (第21図、図版6)

19区で検出された浅い落ち込みである。直径72cm・深さ15cmのほぼ円形で、床は断面が弧状でフラットではない。遺物の出土はなかった。性格不明な土坑である。

4 遺物全体の様相 (第4表)

奈良・平安時代の遺物は、3調査区を総合して、土師器約3,000g・須恵器約2,500g・土製品750gで、各調査区は1,000g前後である。この内、SI-122から約2,130g(約35%)出土しているが、他は中・近世溝から多く出土している。

第5節 中・近世

中・近世の遺構は、方形周溝区画1基、溝4条である。

(19)SX-019 (第16・21図, 第4表, 図版6)

19区で検出された溝である。平成3年度の第3次調査区で検出された溝⁴⁾に連続するもので、一辺22mの方形周溝区画の南東部に該当する。東西は22m程であるが、南北は西辺17m程、東辺は推定23m程と、東辺がやや長い台形に近い方形である。溝の幅は1.35m～1.75mで平均して1.60m前後、深さは10cm～20cmである。北東部隅にはさらに幅0.7m程の深い部分がある。覆土は上層が焼土・炭化物粒を含み、下層がローム粒を多く含む。出土遺物は、縄文土器片が約90g、土師器片が約90g、須恵器片が約130g、中・近世陶磁器片が46gである。

平成3・4年度調査区では、奈良・平安時代土師器の他、15世紀～19世紀の中・近世陶磁器類も出土しており、内部の南辺近くで粘土貼土坑(SK-109)が検出された。なお、南方100m(20Tグリッド付近)で一辺37m程の正方形の周溝及び連続して出入り口部を推測させる遺構SD-002(第8図)が検出されている。溝の規模は幅2.5m・深さ0.45mとやや大きく、1点ながら焙烙が出土している。古墳や奈良・平安時代住居跡・掘立柱建物跡等を切っており、いずれも中・近世の何らかの区画に推測されているが、内部に検出された土坑やピットが30基程は周溝との関連性はうかがえないとしている⁵⁾。内部に掘立柱建物跡が並べば屋敷跡、土坑墓があれば墓域であろうが、いずれも不明瞭であれば、ローム面まで達しない柱穴を有した掘立柱建物か礎石建物が存在した屋敷区画か、畑区画の可能性もあろう。

(17C)SD-082 (第16・21図, 第4表, 図版6)

17C区で南北方向に検出された溝で、周辺の調査区では検出されていない。幅130cm～170cm、深さ35cm。断面は弧状で東側壁が緩やか、或いはもう1条の溝または段差がつく。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土や黒褐色土である。

遺物は、縄文土器片35g、土師器片6g、中・近世陶器片約1,130gである。SX-019の東辺や西側現道に平行するようなので、関連する中・近世の溝であろう。

(17C・18)SD-083 (第16・21図, 第4表, 図版10・11)

17C区と18区で東西方向に長さ19.5m検出された溝である。幅1.3m～2.4m、深さ0.5m～0.65mで、底部の中心は本溝の南寄りに位置し、北側壁は幅0.1m～1.2mの緩やかな傾斜で、西方では南辺に端に幅0.2m程・深さ0.1m程の細い溝が走る。また、中央部では、本溝と若干方向がずれるが、径0.5m～1mのピットが1.6m前後の間隔で並ぶ。覆土は、ローム粒を多く含む暗褐色土が主体である。

遺物は、両調査区併せて、縄文土器片105g、土師器・須恵器片約1,080g、中・近世陶磁器片70g、石製品53g、金属製品(鉄釘等)9gである。

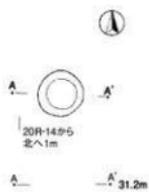
(18)SD-084 (第16・21図, 第4表, 図版11)

18区で検出された溝である。幅1.5m程であるが、東辺に幅0.4m程・深さ0.6m前後の狭い溝が掘られ、底には径25cm程のピットが並ぶ。また、西側壁は幅1m～1.4m・深さ0.1m～0.25mの浅い溝が平行する。遺物は、縄文土器片55g、土師器・須恵器片約330g、中・近世土器約30g、陶磁器約70g、中・近世石製品(砥石等)117g、金属製品(鉄釘等)2gである。

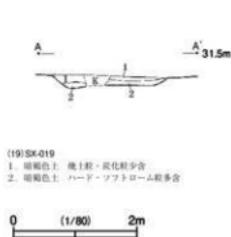
(17A・B)SD-021 (第16・21図, 第4表, 図版7～9)

17A・B区で検出された溝で、東西に隣接する調査区でも連続して検出されているものである。第17次

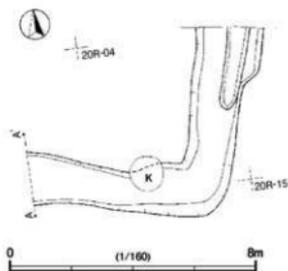
(19) SK-666



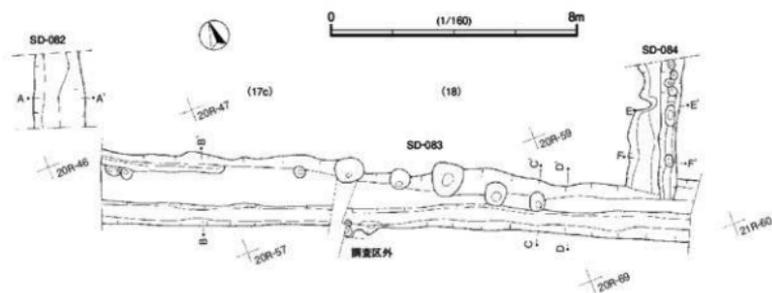
(19) SX-019



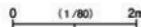
(19) SX-019
 1. 埋藏色土 焼土層・灰化層少含
 2. 埋藏色土 ハード・ソフトローム混多含



(17・18) SD-082~084



(17c) SD-082



(17c) SD-083



(18) SD-083



(18) SD-084



(18) SD-083



(18) SD-084



(17c) SD-082 A-A'

1. 埋藏色土 ローム粒少含
2. 埋藏色土 ローム粒やや多含
3. 埋藏色土 ローム粒多含、底付近はロームブロック多含

(17c) SD-083 B-B'

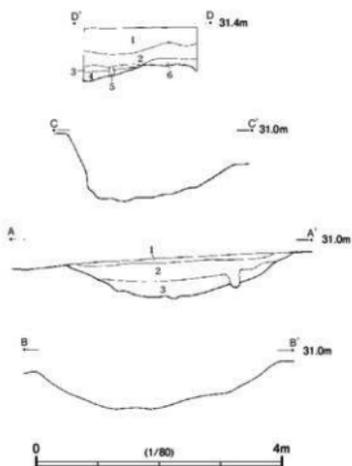
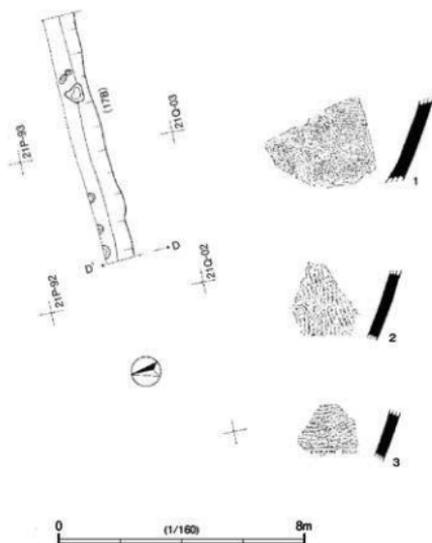
1. 埋藏色土 ローム粒、ロームブロックやや多含
2. 埋藏色土 ローム粒、ロームブロックやや多含
3. 埋藏色土 ローム粒多含
4. 埋藏色土 ローム粒、ロームブロック多含

(18) SD-083 C-C'

1. 埋藏色土 ローム粒・ブロック (小粒) やや多含
2. 埋藏色土 ローム粒・ブロック (大粒) 多含
3. 埋藏色土 ローム粒、ロームブロックやや多含
4. 埋藏色土 ローム粒、ロームブロック多含

(18) SD-084 E-E'

1. 埋藏色土 ローム粒多含
2. 埋藏色土 ローム粒やや多含、ロームブロック少含
3. 埋藏色土 ローム粒やや多含、ロームブロック少含
4. 埋藏色土 マグネシウム・ブロック少含

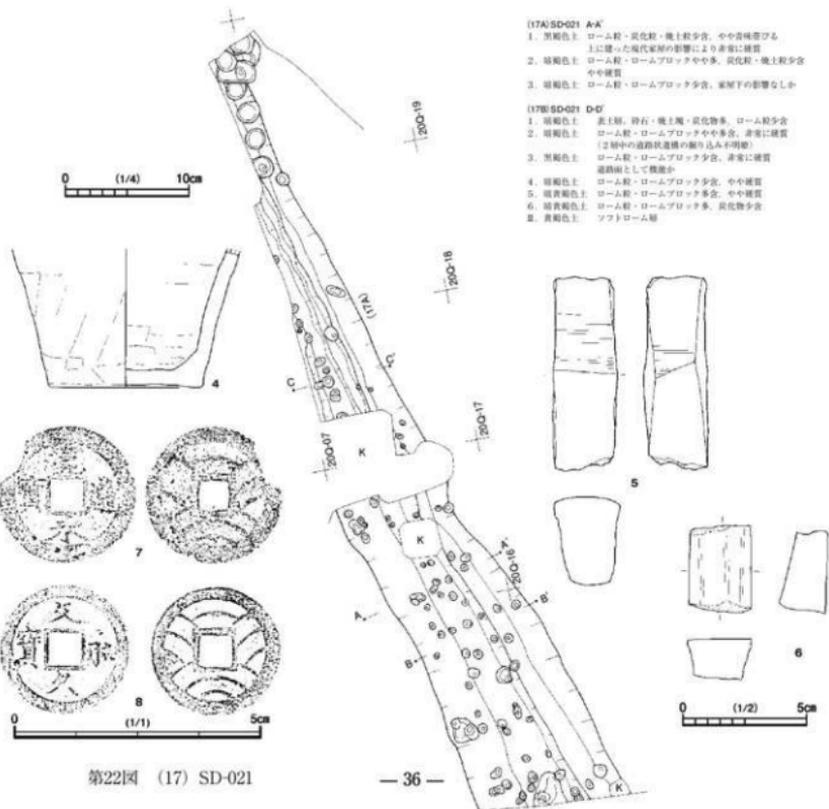


(17A) SD-021 A-K

1. 黒褐色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒少量、やや香味帯びる
上に埋った現代製鉄の炉跡により非常に雑質
2. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックやや多、炭化粒・焼土粒少量
やや硬質
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、家屋下の影響なし

(17B) SD-021 D-D'

1. 暗褐色土 表土層、砂石・焼土層・炭化物多、ローム粒少量
ローム粒・ロームブロックやや多、非常に硬質
〔2層中の道路状遺構の痕跡は不明〕
2. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、非常に硬質
遺跡跡として機能か
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、やや硬質
4. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、やや硬質
5. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、やや硬質
6. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多、炭化物少量
7. 暗褐色土 ソフトローム層



第22図 (17) SD-021

調査では、SD-001として調査されたが、後の整理作業の中でSD-021とした。幅4.5m・深さ0.65m程、断面は弧状であるが、南側壁では若干のテラス状の段差がある。覆土は東部の17B調査区では最下層に硬化層が確認されたが、17A区中央部では現代家屋の下に位置した為に硬化層が存在するも、最下層には検出されない等、地点によって様相が異なる。一部では道路の機能も持った溝であることが明らかである。ただ、水が溜まって泥炭層化していることもないので、排水機能を有したのではないようである。また、調査区中央から西部では内部に径25cm・深さ数cm前後のピットが、17A調査区東部の溝南壁では径60cm前後のピットが集中して検出された。東西の隣接調査区でも同様なピット群が検出されたが、溝として機能した際の植物の根の痕跡も考えられる。波板状整形の様な道の地盤の弱い部分を削って土を充填し直して補強した結果ではなく、また、17A区東端部の斜面部のピットは植栽痕であることも考えられる。

遺物は、縄土器片約880g、土師器・須恵器片約1,620g、中・近土器片1,080g、陶器片約2,200g、磁器片約430g、石製品（砥石等）1,080g、金属製品（鉄釘等）51gと、廃棄されたとみられる近世主体の遺物が出土している。土地を区画する境溝兼根切り溝の可能性が高いと考えられる。

遺物（第22図、図版14・15）⁵⁾

中・近世遺物については、中世陶器、中・近世石製品、金属製品（銭貨）は実測図や拓本を掲載したが、近世陶磁器類については写真のみ掲載し、アルファベット小文字を付した。図化・写真掲載したものは、全てSD-021覆土出土である。

（陶磁器）（第22図、図版14・15）

4は明赤褐色で硬質な無釉陶器壺片で、底部径は推定12.2cmである。胎土は長石粒を多く含み、調整は内外面ヘラケズリ、底部は砂利上で成形後無調整である。形状・胎土等から、焼成がやや不良な中世常滑産壺の可能性が高いが、上部が欠損していることから詳細な時期は不明である。なお、明らかな中世遺物はこの1点のみであり、若干であるが近世の可能性も否定できない。

写真掲載のみのa～gは、近世陶磁器類である。aは口縁部が欠損しているが、a・b共瀬戸・美濃産磁器で19世紀前半の染付端反碗であろう。aは外面にコバルトで植物の葉が描かれ、bは植物或いは山水画が描かれるが、被熱により釉色が灰色化している。cは京都・信楽系灰釉茶碗である。現存部は無文であるが器形は小杉茶碗であり、19世紀前半の所産とみられる。d・eは瀬戸・美濃灰釉徳利（べこかん徳利）で、釉色はdが緑褐色、eが黄褐色で、時期は、口縁部が欠損しているが、器形の膨らみ具合からdが19世紀前葉、eが18世紀後葉の可能性が考えられる。なお、eの写真は撮影時の安定の関係で上下逆である。fは、瀬戸・美濃灰釉菊皿で18世紀前葉、gは瀬戸・美濃灰釉鉢（黄瀬戸鉢）で、内面に刷毛による波状文様が描かれる。

（土器）（図版15）

g～kも写真掲載のみの遺物である。gは産地不明鉄釉黒色土瓶で、注口部が直線的でなく2箇所で曲がる土瓶で、18世紀中葉とみられる。i～kは焙烙である。iは高さ3.5cm、底部は無調整、内耳は比較的丁寧に造られている。jは高さ5.0cm、器内は厚く、底部はナデ調整されている。i・k共に胴部から底部は明確な段差なく、胎土には混入物が少ない。kは高さ5.5cm、胴部と底部の境に高台状の段差があり、底部はナデ調整されている。内耳は雑なつくりで、胎土は長石等の小石を多く含む。焼成は最も硬質で、jがやや軟質、iは軟質である。i・jは江戸か千葉産、kは常陸産の可能性がある。詳細な時期は不明であるが、17世紀～19世紀（近世）のものである。

第2表 小屋ノ内遺跡出土土器観察表

遺構番号の()内は調査時番号、数値の()は推定値、[]は現存値、色調の二段書きは上段内面・下段外面。

| 遺構番号 | 検出番号 | 光源番号 | 器種 | 器形 | 口径(mm) | 底径(mm) | 器高(mm) | 遺存率 | 色調 | 胎土混入物 | 地味 | 調整(外面) | 調整(内面) | 底足切り | 底足磨削 | 備考 | |
|-----------------|------|------|-----|--------|---------------|--------|--------|---------|----------------------|--------------------|----------------------------------|-------------|---------------|---------------|------|------------------|-----------------------------|
| SK-063 SK001 | 1809 | 1~4 | 1~4 | 縄文 | ヒナチムヤ 先丸土器 | — | — | — | 灰褐色・明水褐色 | 石英・長石の微小砂粒 やや多量 | 良好 | 目紋未収文 | 目紋未収文 | — | — | 1~4同一器種、早期未加工式 | |
| SD-023 SD001 | 1809 | 5 | 3 | 縄文 | 鉢 | — | — | — | 明水褐色 | 石英主体、微小砂粒 やや多量 | 良好 | 磨面未収 | ナデ | — | — | 中期以降の形式または後期型の内式 | |
| | | 6 | 2 | 縄文 | 鉢 | — | — | — | (L25)黄褐色 | 石英微小砂粒やや多量 | 良好 | 手磨ひ縄文 | ナデ | — | — | 後期流行1式 | |
| | | 7 | 1 | 縄文 | 鉢 | — | — | — | (L25)水褐色 | 石英微小砂粒やや多量 | 良好 | 竹管文・沈泥文・磨き | ナデ | — | — | 後期から晩期流行式 | |
| SI-122 | 1809 | 1 | 7 | 灰陶器 | 高台付皿 | (35.0) | (7.1) | 3.2 | 20% | 灰黄色 | 微砂粒極めて少量で緻密 石英・長石右石は塊状 時多量 | 良好 | ナデ | ナデ | 不明 | 不明 | 釉はなし、割壊した部分の可能性あり。 |
| | | 2 | 1 | 土師器 | 杯 | 12.6 | 6.4 | 4.2 | 80% | 橙褐色 | 石英は小砂粒スコリア 状少量 | 良好 | ナデ | ナデ | 不明 | 手磨ひへう割り | |
| | | 3 | 2 | 土師器 | 杯 | (12.1) | — | (4.1) | 10% | (L25)黄褐色 | 長石・黒色微小砂粒少量 含ま | 良好 | 手磨ひへう割り ナデ | ナデ | 不明 | 不明 | |
| | | 4 | 4 | 土師器 | 杯 | (6.8) | — | (3.5) | 30% | 橙褐色 | 石英微小砂粒やや多量 | 良好 | ナデ | ナデ | 不明 | 不明 | 内外面観察による 表面磨削痕跡、 特に外面 |
| | | 5 | 3 | 土師器 | 杯 | (6.8) | (9.0) | 4.5 | 30% | (L25)黄褐色 | 石英・金雲母を含む微小砂 粒少量 | 良好 | 手磨ひへう割り ナデ | ナデ・ミガキ | 回転未収 | 手磨ひへう割り | |
| | | 6 | 5 | 土師器 | 鉢 | (17.0) | 7.8 | 6.7 | 60% | 橙褐色 | 石英主体、微小砂粒少量 含ま | 良好 | 手磨ひへう割り ナデ | ナデ | 不明 | 不明 | 手磨ひへう割り |
| | | 7 | 6 | 土師器 | 鉢 | — | (8.0) | (3.7) | 10% | (L25)橙褐色 | 石英主体、微小砂粒少量 含ま | 良好 | 手磨ひへう割り ナデ | ナデ | 回転未収 | 無調整 | |
| | | 8 | 12 | 須恵器 | 甕 | (22.0) | — | (7.5) | 10% | 橙褐色 | 少 | 良好 | タタキ、ナデ | ナデ、ヘウナ デ | — | — | — |
| | | 9 | 10 | 須恵器 | 甕 | (24.0) | — | (2.0) | 5% | 黒褐色 | 石英・長石主体、微砂粒 やや多量 | 良好 | タタキ、ナデ | ナデ、ヘウナ デ | — | — | — |
| | | 10 | 8 | 須恵器 | 瓶 | — | (13.0) | (8.5) | 10% | 灰褐色 (L25)黄褐色 | 石英・長石微砂粒やや多 量 | 良好 | へう割り、タタ キ | へう割り、ヘウ ナデ | — | — | — |
| | | 11 | 9 | 須恵器 | 甕? | — | — | — | 10% | 黄褐色 灰黄色 | 石英・長石微砂粒やや多 量 | 良好 | タタキ | ナデ | — | — | — |
| | | 12 | 17 | 須恵器 | 甕 | — | — | — | — | 灰黄色褐色 | 石英・長石微砂粒少量 含ま | 良好 | タタキ | ヘウナデ | — | — | — |
| | | 13 | 11 | 須恵器 | 甕 | — | (8.0) | (12.5) | 10% | 灰黄色 | 長石・石英微砂粒少量 含ま | 良好 | 回転へう割り | ナデ | 不明 | 無調整 | |
| 14 | 14 | 土師器 | 甕 | (24.0) | — | (6.0) | 10% | 明水褐色 | 石英・金雲母を含む微砂粒 やや多量 | 良好 | へう割り、ナデ | ナデ、ヘウナ デ | — | — | — | | |
| 15 | 15 | 土師器 | 甕 | (25.0) | — | (3.3) | 10% | 明水褐色 | 石英・金雲母を含む微砂粒 やや多量 | 良好 | ナデ | ナデ、ヘウナ デ | — | — | — | | |
| 16 | 13 | 土師器 | 甕 | — | — | (8.7) | 15% | 明水褐色 | 石英主体の微砂粒 やや多量 | 良好 | へう割り、ナデ | ナデ、ヘウナ デ | — | — | — | | |
| 17 | 16 | 土師器 | 鉢 | — | — | — | 5% | (L25)褐色 | 石英主体、微砂粒少量 含ま | 良好 | へう割り、ヘウ ナデ | ヘウナデ | — | — | — | | |
| SD-023 SD001 | 2109 | 1 | 4 | 須恵器 | 甕 | — | — | — | 黄褐色 灰黄色 | 長石微砂粒やや多量 | 良好 | タタキ | ナデ | — | — | — | |
| | | 2 | 5 | 須恵器 | 甕 | — | — | — | — | 灰黄色 黄褐色 | 長石微砂粒多量 | 良好 | タタキ | ナデ | — | — | — |
| | | 3 | 6 | 須恵器 | 甕 | — | — | — | — | 黄褐色 | 長石微砂粒多量 | 良好 | タタキ | ナデ | — | — | — |
| | | 4 | 7 | 常滑? | 壺 | — | (12.2) | (9.4) | 15% | 橙褐色 明水褐色 | 石英・長石微砂粒やや多量 | 良好 | へう割り、ナデ | ナデ、ヘウナ デ | — | — | 無調整 |

第3表 小屋ノ内遺跡出土銭貨計測表

| 検出番号 | 遺構番号 | 銭種 | 銭形 | 書体 | 製造地 | 初鑄年 | | 外縁外径 (mm) | | 外縁内径 (mm) | | 内縁外径 (mm) | | 内縁内径 (mm) | | 外縁厚 (mm) | 内面厚 (mm) | 重量 (g) | 備考 |
|--------|--------|----|------|----|-------------|-------|------|-----------|------|-----------|------|-----------|-----|-----------|-----|----------|----------|--------|----|
| | | | | | | 和暦 | 西暦 | 縦 | 横 | 縦 | 横 | 縦 | 横 | | | | | | |
| 第2297号 | SD-021 | 3 | 寛永通寶 | 真文 | 江戸浅草橋堀町小 | 文政4年小 | 1821 | 28.3 | 28.4 | 21.1 | 21.4 | 9.1 | 8.5 | 6.7 | 6.5 | 1.3 | 0.9 | 4.07 | 流通 |
| 第2298号 | SD-021 | 4 | 文久永寶 | 草文 | 江戸浅草橋または大工町 | 文久3年 | 1863 | 36.6 | 36.6 | 22.1 | 22.2 | 9.1 | 8.7 | 7.1 | 6.9 | 1.0 | 0.5 | 2.92 | 流通 |

(石製品) (第22図、図版14)

5・6は、いずれも凝灰岩製の砥石である。5は側面の断面形が中央部が厚い菱形であるが、両端部が欠損し、現長80mm・最大幅26mm・最大厚36mmである。使用面は実測図の表と裏の2面であり、両側面は凹凸があり、生産時に粗い磨きで仕上げられたままとみられる。色調は灰オリーブ色である。6はより細い

第4表 小屋ノ内遺跡出土遺物組成表(重量:g)

| 遺 物 等 | | 縄文 | | 奈良-平安 | | | 中-近世 | | | 古代-近世 | |
|-------|------------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|----|
| 調査号 | 通し番号 | 土器 | 土師器 | 須恵器 | 土製品 | 土器 | 陶器 | 磁器 | 石製品 | 金属製品 | |
| 17) | SK-001 | SK-605 | 58 | | 13 | | | | | | |
| | SD-001 | SD-021 | 881 | 801 | 817 | 1,080 | 2,190 | 428 | 1,078 | 51 | |
| | SD-002 | SD-082 | 35 | 6 | | | 1,128 | | | | |
| | SD-003 | SD-083 | 99 | 126 | 96 | | | | | | |
| | グリッド等 | | 85 | 41 | 11 | | | | 6 | | 3 |
| 小 計 | | 1,158 | 974 | 940 | 0 | 1,080 | 3,318 | 434 | 1,078 | 54 | |
| 18) | SD-003 | SD-083 | 6 | 243 | 616 | | 27 | 37 | 53 | 9 | |
| | SD-004 | SD-084 | 55 | 205 | 127 | | 31 | 67 | 1 | 117 | 2 |
| | 表層、グリッド等 | | 17 | 463 | 273 | | | 24 | 2 | 49 | 2 |
| | 小 計 | | 78 | 911 | 1,014 | 0 | 31 | 118 | 40 | 219 | 13 |
| 19) | SK-001 | SK-606 | | | | | | | | | |
| | SI-122 | SI-122 | 45 | 1,020 | 358 | 750 | 98 | | | | |
| | SB-001 | SB-154 | 33 | 4 | | | | | | | |
| | SB-002 | SB-135 | 16 | 1 | | | | | | | |
| | SX-019 | SX-019 | 87 | 87 | 132 | | 39 | 7 | | | |
| | グリッド、遺跡-1等 | | 32 | 30 | 50 | | | 45 | 38 | | |
| | 小 計 | | 183 | 1,142 | 540 | 750 | 98 | 85 | 45 | 0 | 0 |
| 合 計 | | 1,419 | 3,027 | 2,494 | 750 | 1,309 | 3,321 | 519 | 1,297 | 67 | |

※SD-021の中-近世陶器中に、中世常滑窯の可能性あるものG23を含む。

もので、両側が欠損し、現長37mm・最大幅26mm・最大厚19mmで、使用面は1面のみで、他の3面は生産時の刷毛目状整形のままである。欠損部は灰黄色であるが、他面は暗オリーブ灰色で、長期間で内部の鉄分が滲み出て酸化したと考えられる。いずれも、近世のものと考えられる。

(金属製品) (第22図, 第3表, 図版14)

7・8は近世銭貨である。7は寛永通寶, 8は文久永寶で、いずれも幕末19世紀の波銭である。他に金属製品がSD-021・083・084から小刀または鎌や鉄釘等が若干出土したが、小片のため図化していない。

注

1・4・5 糸川道行ほか 2006『四街道市小屋ノ内遺跡(2)縄文時代~中・近世編-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-』(公財)千葉県教育振興財団

2・3 糸川道行ほか 2007『四街道市小屋ノ内遺跡(3)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ-』

6 中・近世遺物については、主に以下の文献を参考にした。

藤沢良祐 1998『瀬戸市史 陶磁史篇6』瀬戸市

水本和美ほか 1998『陶磁器・土器分類・計測基準』[伝中・上富士前Ⅱ]豊島区教育委員会

小川浩編 1972『寛永通寶銭譜』日本古銭研究会

第4章 まとめ

第1節 出口遺跡

本書に収録した調査成果は、出口遺跡の北部に点在する平成23年度第17次、平成25年度第18・19次調査地点で、対象面積計1,606㎡、上層本調査面積計919㎡、下層は確認調査で終了した。

旧石器時代の遺物は確認調査では発見されなかったが、第18次調査区の上層遺構プラン確認面（Ⅲ層上面）で発見された石器1点が整理作業の段階で旧石器時代末期の尖頭器と確認された。周辺ではⅡc層～Ⅱ層のブロックが散在し、Ⅲ層のブロックは検出されてない地区である。

縄文時代は、第17次調査区で陥穴1基が検出された。出口遺跡では過去2基が検出されているのみである。縄文土器は出土しなかったが、過去の調査では早・前期主体に晩期まで出土している。

古墳時代は、第18・19次調査区で後期古墳の周溝部分が1基ずつ検出された。(18)D03号墳は3次調査区で調査された残り約半分であったが、削平が著しく、マウンドは勿論、周溝の残存状況も悪く、周溝内土坑が3基検出された。また、(19)D15号墳は周溝が長さ8mほどのみ検出された新発見の古墳である。該期の遺物は土師器片1点のみであった。

中・近世は、17次調査区で溝1条、18次調査区で道路跡1条が検出された。いずれも現道に併行し、隣接調査区で検出された遺構に連続するものである。遺物は出土しなかった。

第2節 小屋ノ内遺跡

本書に収録した調査成果は、小屋ノ内遺跡のほぼ中央部に点在し、平成26年度第17・18次、平成27年度第19次、対象面積計666㎡である。上層本調査面積666㎡で検出した遺構は、縄文時代炉穴1基(17)、奈良・平安時代竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡2棟・土坑1基(19)、中・近世方形周溝区画1基(19)・溝4条(17・18)であった。下層については、確認調査の結果、石器1点を発見しグリッドを拡張したが、それ以上の遺物は出土せず、整理の結果、自然石と判断した。

縄文時代は、17次調査区で炉穴1基が、早期末茅山式土器を伴って検出された。他に縄文土器は、中期加曾利E式または後期堀之内式、後期末～晩期初頭の安行式土器が出土している。

奈良・平安時代は、19次調査区で隣接する第3・4次調査区で一部が検出された竪穴住居跡1軒の連続部分、掘立柱建物跡2棟の一部、土坑1基が検出された。竪穴住居跡の時期は、遺物群の様相から9世紀前葉～中葉と推測される。これらは、主に南側に隣接する第1次～第4次調査区北部(20Rグリッド主体)で検出された奈良・平安時代の小規模集落の一角であろう。

中・近世は、19次調査区で方形周溝区画1基が検出されたが、内部に該期の掘立柱建物跡や土坑墓が検出されなかったことから、屋敷や墓地区画ではなく、畑等の区画が想像できる。また、17次・18次調査区で溝4条が検出された。この内、(17A・B)SD-021は東西に隣接する第1次～第4次調査区でも検出されているが、(17C・18)SD-082～084は周辺部の調査が空白であり、新規発見の溝である。ただ、17C調査区と第19次調査区との間を南北に通る現道と併行もしくは直行することから、近世集落や道に關係する区画溝と思われる。

第3節 物井地区遺跡群調査概要(第23図、第5表)

物井地区遺跡群の当財団による発掘調査は終了し本書が最後となるので、簡単に概要を記す。第5表は各報告書の抄録から集成したもので、遺構の種類は独自の判断で集約し、複数の調査区にかかる場合は遺構数が重複するので、あくまで概要を把握するための表である。なお、第1章第2節「周辺の遺跡」でも触れており、詳細は既刊報告書を参照されたい。

旧石器時代

立川ローム層の下部から上部までにわたり石器が出土しており、全体では、石器集中地点(ブロック)が約200箇所検出された。ブロックが20以上検出されたのは、清水遺跡、出口・鐘塚遺跡、出口遺跡、御山遺跡、小屋ノ内遺跡である。この内、環状や馬蹄形ブロック群は直径20m～50m規模で、出口遺跡、御山遺跡、小屋ノ内遺跡等、谷津に近い台地上で検出された。

縄文時代

竪穴住居跡は11軒のみであり、前期・後期を主に各遺跡に散在して検出されている。陥穴75基は各遺跡で散在し、炬穴61基は御山、小屋ノ内遺跡、稲荷塚遺跡、中久喜遺跡で検出された。いずれも内陸部で多い傾向がある。また、遺構が検出されなくても、土器は後期主体に、早期～晩期の各時期のものが出土している。特に嶋越遺跡では後期加曾利B式土器～晩期安行3式土器や土偶が斜面部に大量に廃棄されており、注目される。

弥生時代～古墳時代初頭

弥生時代中期は、嶋越遺跡から宮ノ台式期の遺物が出土している。弥生時代後期から古墳時代初頭は判別が難しい時期で、各報告書整理担当者によって判断も異なるので、第5表では弥生時代に含めた。計66軒検出され、新久遺跡18軒、北ノ作遺跡に32軒と多い他は、各遺跡に散在する。

古墳時代後期

竪穴住居跡は全体で約130軒検出され、館ノ山遺跡89軒、小屋ノ内遺跡18軒、稲荷塚遺跡11軒と、物井地区中央部から南部に集中する。

一方、古墳群は、40基以上の物井古墳群(清水遺跡、新久遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡)、御山古墳群(御山遺跡)と、南北から入り込む谷津が交差する出口遺跡と小屋ノ内遺跡の境付近より内陸側(西側)に集中し、集落域と墓域が離れて存在する。なお、小屋ノ内遺跡や稲荷塚遺跡でも古墳は検出されているが、該期の集落はやや離れた位置で検出されており、古墳の中には、奈良・平安時代の周溝遺構を含むものがある可能性もある。物井古墳群は、中小規模(12m～23m)の前方後円墳、帆立貝古墳、陸橋部を持つ円墳、単純円墳に分類され、帆立貝古墳・円墳が主体で、6世紀後葉から8世紀初頭の造営である。

奈良・平安時代

竪穴住居跡は、全体で約570軒検出され、小屋ノ内遺跡に236軒、稲荷塚遺跡に229軒と集中する。特に、小屋ノ内遺跡は、規格的配列掘立柱建物群も存在し、郷内部衝とも言うべき施設や倉庫・牢屋・祭祀空間・仏教的信仰空間なども想定され、遺物は文字・記号資料が多く、「千葉部物部郷」の中核となる集落とみられる。時期は8世紀～10世紀であるが、ピークは8世紀後半～9世紀前半と、北総地域での一般的盛衰と一致している。なお、馬場遺跡や嶋越遺跡等、物井地区の南東部で限定された調査範囲で検出されているが、東部は現集落地区で土地区画整理事業範囲外なので、その連続が埋もれていることが想像される。

第5表 物井地区遺跡・時期別遺構表

〔注：調査対象の遺跡名に集計したものであり、重複する遺構も存在する。〕

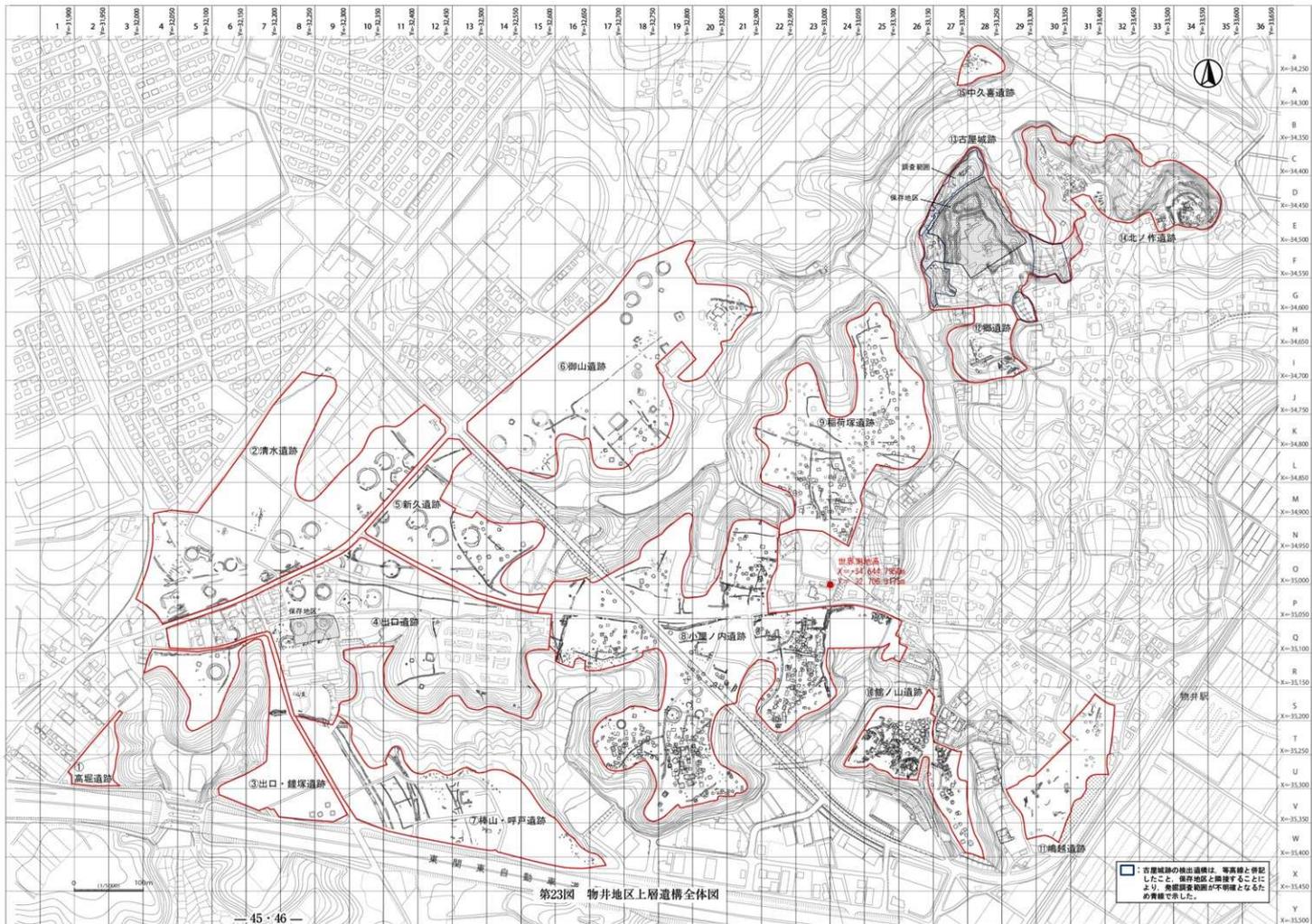
| 遺跡名 (埋蔵物名) | 調査年度 (調査対象の 期のみ) | 遺跡年代 | 縄文時代 | | | | | | 縄土時代 | | | | | | 古墳時代 | | | | | | 奈良・平安時代 | | | | | | 中世 | | | | | | 備考 | | | | | |
|---------------|------------------------|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|--|--|----|-------|-----------|----------|-----------|------------|
| | | | 縄文前期 | 縄文中期 | 縄文後期 | 縄土前期 | 縄土中期 | 縄土後期 | 古墳前期 | 古墳中期 | 古墳後期 | 古墳不明 | 古墳不明 | 古墳不明 | 古墳不明 | 古墳不明 | 古墳不明 | 古墳不明 | 古墳不明 | 古墳不明 | 古墳不明 | | | | | | | | |
| 1 北瀬遺跡 | 1987-2000 | 3,060 | 4 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 792 X X I | 物井町歴史民俗資料館 |
| 2 清水遺跡(1) | 1985-2006 | 50,188 | 6 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 628 X | | |
| 3 清水遺跡(2) | 1986-2003 | 20,180 | 28 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 674 X I | | |
| 4 清水遺跡(3) | 2012-2014 | 2,642 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 743 X II | | |
| 5 田代川遺跡(1) | 1986 | 19,700 | 22 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 357 II | | | |
| 6 田代川遺跡(2) | 2009-2010 | 2,055 | 7 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 743 X III | | | |
| 7 田代川遺跡(3) | 1987-2010 | 41,229 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 675 X II | | | |
| 8 田代川遺跡(4) | 1987-2010 | 41,229 | 29 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 712 X II | | | |
| 9 田代川遺跡(5) | 2011-2013 | 1,696 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 705 X X V | | | |
| 10 新久遺跡(1) | 1985-2001 | 20,310 | 16 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 668 X | | | |
| 11 新久遺跡(2) | 1986-2001 | 20,510 | 10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 674 X I | | | |
| 12 柳山遺跡(1) | 1984-1985 | 27,659 | 26 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 674 X I | | | |
| 13 柳山遺跡(2) | 1991-1999 | 28,410 | 6 | 5 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 242 I | | | |
| 14 柳山呼子遺跡 | 1984-2015 | 282,761 | 14 | 25 | 1 | 10 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 577 X V I | | | |
| 15 小原ノ内遺跡(1) | 1989-2000 | 57,000 | 25 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 782 X X F | | | |
| 16 小原ノ内遺跡(2) | 1989-1986 | 60,300 | 12 | 22 | 1 | 165 | 12 | 1 | 3 | 1 | 16 | 1 | 7 | 236 | 124 | 26 | 5 | 2 | 835 | 3 | 160 | | | | | | | | | | | | | 499 遺 | | | | |
| 17 小原ノ内遺跡(3) | 2009-2003 | 9,000 | 4 | 4 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 557 B | | | |
| 18 小原ノ内遺跡(4) | 2014-2015 | 666 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 586 V | | | |
| 19 船久遺跡 | 1994-2003 | 45,104 | 9 | 16 | 9 | 4 | 5 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 765 X X V | | | |
| 20 船ノ内遺跡(1) | 1997-1999 | 19,200 | 3 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 612 M | | | |
| 21 船ノ内遺跡(2) | 2011 | 1,653 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 667 B | | | |
| 22 船ノ内遺跡(3) | 2014 | 3,353 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 718 X V | | | |
| 23 船越遺跡(1) | 2009-2010 | 14,592 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 728 X III | | | |
| 24 船越遺跡(2) | 2009-2010 | 13,922 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 722 X III | | | |
| 25 船越遺跡 | 1993-2000 | 8,350 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 719 X X | | | |
| 26 占代遺跡 | 1981-2015 | 8,830 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 665 W | | | |
| 27 北ノ内遺跡 | 1996-1997 | 31,900 | 1 | 3 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 711 X III | | | |
| 28 中ノ内遺跡 | 1996 | 3,100 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 665 W | | | |

中世

中世前期（12世紀～14世紀）の遺構・遺物は殆ど検出されていない。15世紀前半主体の遺構は小屋ノ内遺跡の台地整形区画、郷遺跡の水場遺構、館ノ山遺跡の館跡、15世紀後半は古屋城跡、15世紀後半～16世紀代は北ノ作遺跡の城館跡である。城館の主体は、鹿島川支流の小谷津内から鹿島川本流側へ移ったことが想像できる。これは、北総地域でよくみられる傾向で、小谷津内水田から広域沖積地への耕地の拡大と戦国の争乱による、見透しの良い位置の選択などが考えられる。

近世

溝主体にはほぼ全域で検出されているが、掘立柱建物跡や溝は小屋ノ内遺跡に、墓域は御山遺跡で主に検出された。御山遺跡では寺院跡も検出されている。現集落の主体である物井地区土地区画整理事業範囲より東部域が中・近世以来続く物井集落の中心地で、西部は畑作を中心とした地区であったことが推測できる。



第23図 物井地区上層遺構全体図

写 真 图 版



山口遺跡 (17)~(18)

小田ノ内遺跡 (17)~(18)



(17)SK-001 (東から)



(17)SD-001 (西から)



(17) 下層確認状況 (西から)



(18)D03 号墳周溝 (西から)



(18)SD-002 (西から)



(19)D15 号墳周溝 (北東から)



(18)20R-49 ローム層
土層断面 (南から)



(17A) SK-665 (南から)



(19) S1-122 (北から)

(19)SI-122 カマド (1)
(南から)



(19)SI-122 カマド (2)
(南から)



(19)SB-154・SB-155
(北から)





(19)SK-666 (南から)



(19)SX-019 (北から)



(19)SX-019 (西から)



(17A) SD-021 (西から)



(17A) SD-021 (東から)



(17A) SD-021 (西から)



(17A) SD-021 (東から)



(17A) SD-021 土層断面 (西から)



(17B) SD-021 (西から)

(17B)SD-021 土層断面
(東から)



(17B)SD-082 (南から)



(17B)SD-082 土層断面
(南から)





(17C) SD-083 (西から)



(17C) SD-083 土層断面
(東から)



(18) SD-083 (西南から)

(18)SD-083 土層断面
(東から)



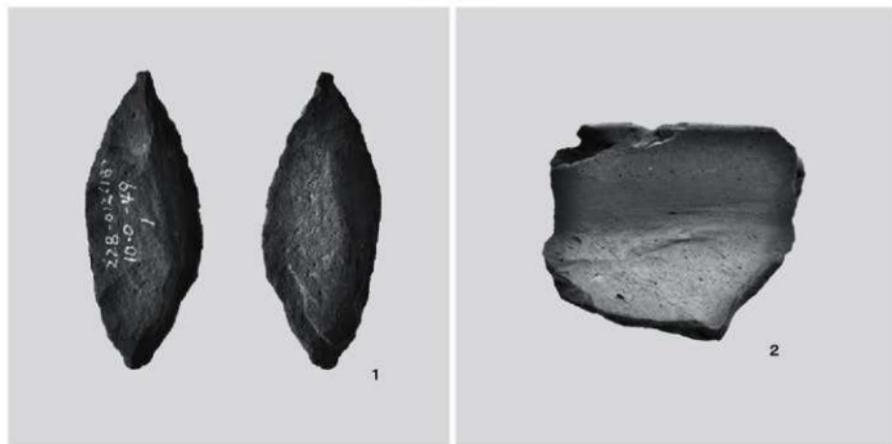
(18)SD-084 (北から)



(18)SD-084 土層断面
(南から)

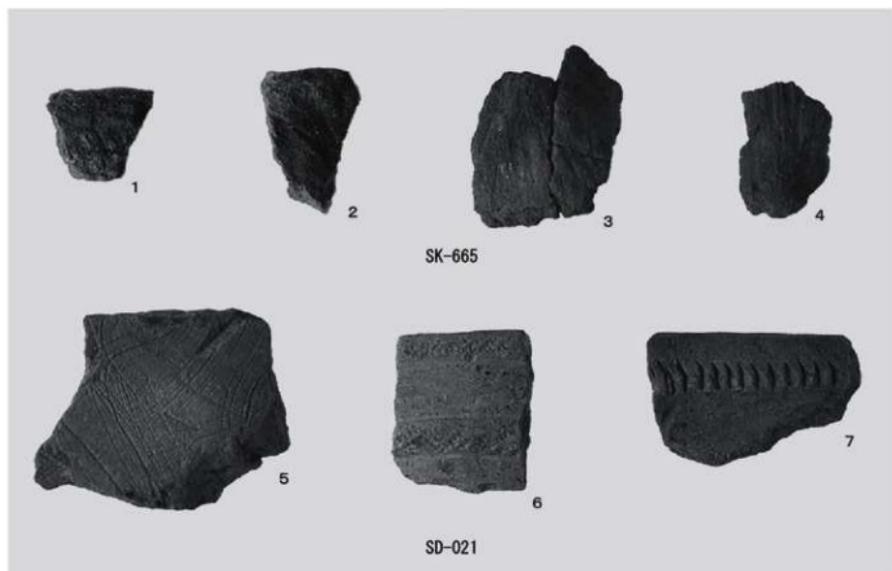


出口遺跡

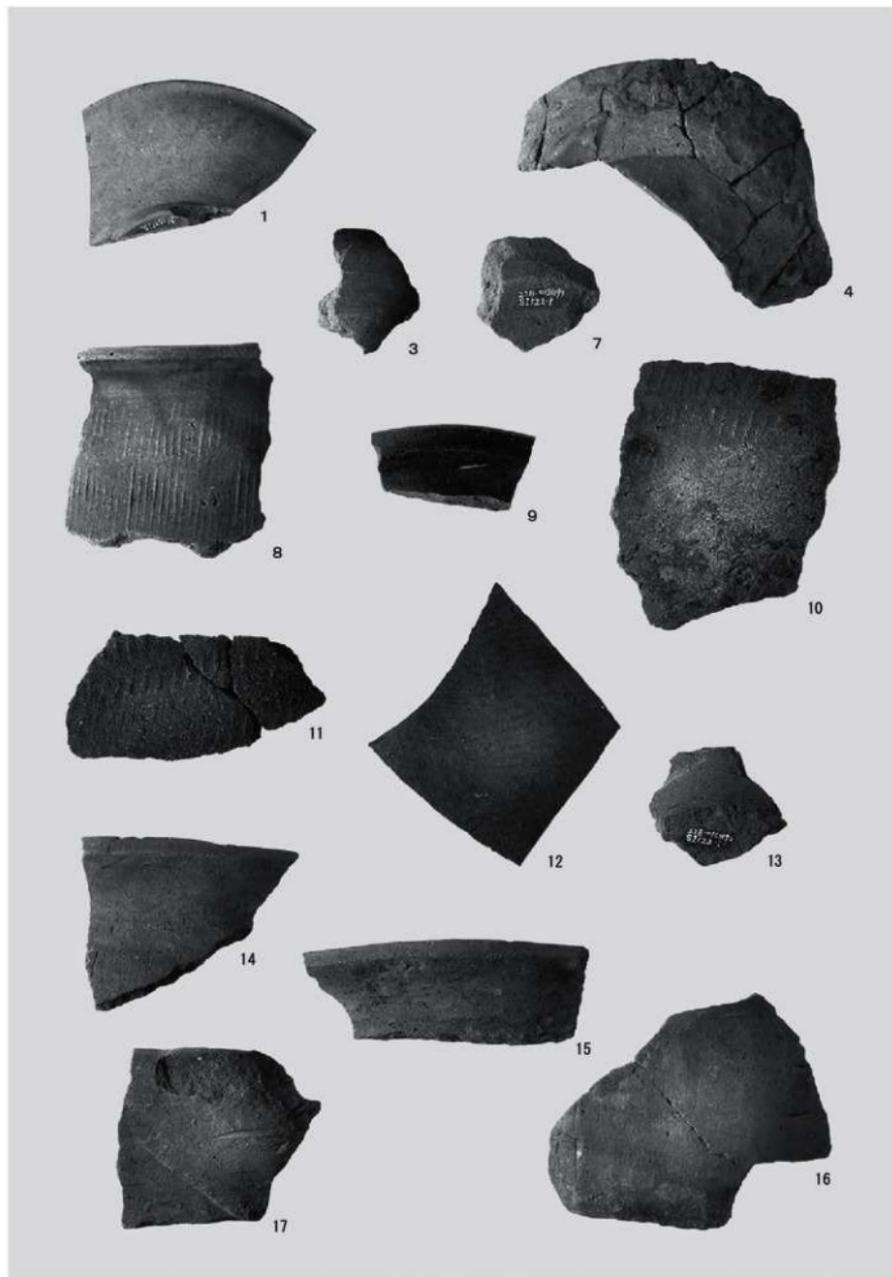


(18) 遺物

小屋ノ内遺跡



(17) 縄文土器



(19) SI-122 遺物 - 1



(19)SI-122-2



(19)SI-122-6



(19)SI-122-18

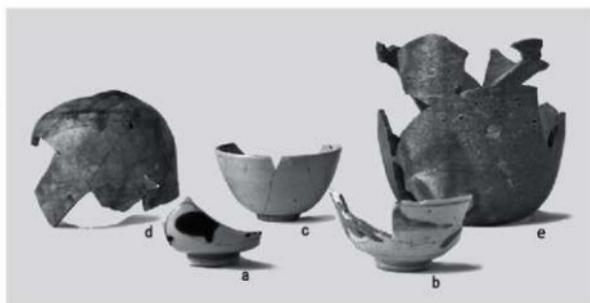


(19)SI-122-5

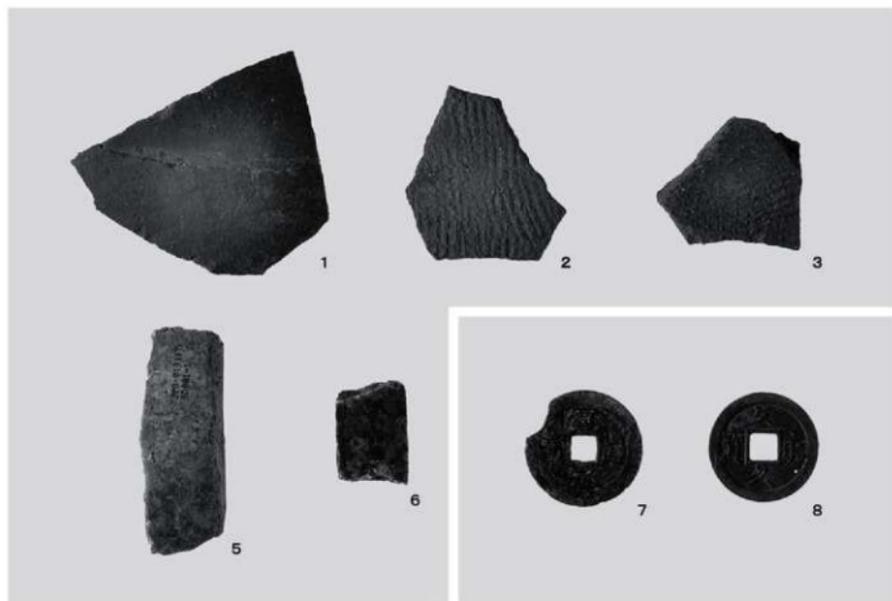
(19) SI-122 遺物 - 2



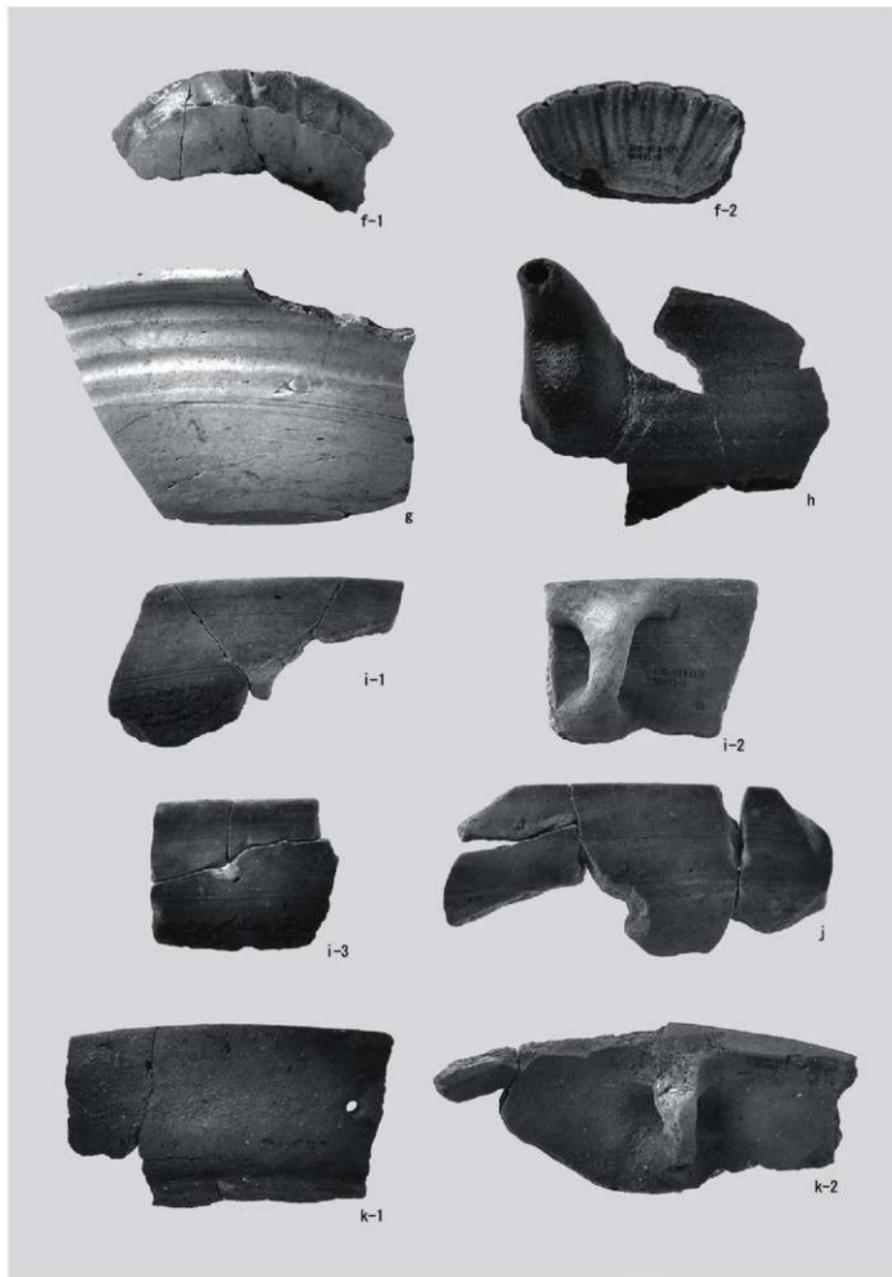
4



(17) SD-021 中・近世遺物 - 1



(17) SD-021 古墳時代以降遺物



(17) SD-021 中・近世遺物 - 2

報告書抄録

| ふりがな | よつかいどうしでぐちいせき(3)・こやのうちいせき(4) | | | | | | |
|-----------------|--|-------------------------|--|----------------------------------|---------------------------|---|------------------------------------|
| 書名 | 四街道市出口遺跡(3)・小屋ノ内遺跡(4) | | | | | | |
| 副書名 | 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | |
| 巻次 | XXV | | | | | | |
| シリーズ名 | 千葉県教育振興財団調査報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第765集 | | | | | | |
| 編著者名 | 井上哲朗 | | | | | | |
| 編集機関 | 公益財団法人 千葉県教育振興財団 | | | | | | |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043(424)4848 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2017年2月10日 | | | | | | |
| ふりがな | ふりがな | コード | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 遺跡番号 | (世界測地系) | | | | |
| 出口遺跡(17) | よつかいどうしでぐちいせき 四街道市物井字 出口1406-14の 一部ほか | 12228 012(17) | 35度 41分 13秒 | 140度 11分 21秒 | 20111121 ～ 20111129 | 176㎡ | 独立行政法人都市再生機構物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査 |
| 出口遺跡(18) | よつかいどうしでぐちいせき 四街道市物井字 出口1406-25の 一部ほか | 12228 012(18) | 35度 41分 16秒 | 140度 11分 14秒 | 20130603 ～ 20130625 | 636㎡ | |
| 出口遺跡(19) | よつかいどうしでぐちいせき 四街道市物井字 出口1406-29ほか | 12228 012(19) | 35度 41分 12秒 | 140度 11分 5秒 | 20130627 ～ 20130718 | 794㎡ | |
| 小屋ノ内遺跡(17) | よつかいどうしでぐちいせき 四街道市物井字 小屋ノ内1330-1 ほか | 12228 013(17) | 35度 41分 13秒 | 140度 11分 35秒 | 20141121 ～ 20141225 | 526㎡ | |
| 小屋ノ内遺跡(18) | よつかいどうしでぐちいせき 四街道市物井字 小屋ノ内1329-20 | 12228 013(18) | 35度 41分 10秒 | 140度 11分 35秒 | 20150224 ～ 20150311 | 60㎡ | |
| 小屋ノ内遺跡(19) | よつかいどうしでぐちいせき 四街道市物井字 小屋ノ内1332-2 の一部 | 12228 013(19) | 35度 41分 10秒 | 140度 11分 34秒 | 20150603 ～ 20150802 | 80㎡ | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 出口遺跡(17)～(19) | 生産 墓 集落 | 縄文時代 古墳時代 中・近世 | 陥穴 円墳(周溝) 周溝内土坑 溝 道路跡 | 1基 2基 3基 1条 1条 | 縄文土器・石器 土師器 | 2基の古墳の内、1基は隣接区で既に調査されたもの、1基は新規発見であり、いずれも周溝部分のみ残存していた。 | |
| 小屋ノ内遺跡(17)～(19) | 集落 集落 集落 | 縄文時代 奈良・平安時代 中・近世 | 炉穴 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 方形周溝区画 溝 | 1基 1軒 2棟 1基 1基 4条 | 縄文土器 土師器・須恵器・灰胎陶器 | 奈良・平安時代竪穴住居跡の時期は、平安時代初頭(9世紀前半～中葉頃)と推定される。中・近世周溝区画は既調査分の成果と合わせると、一辺20m程の方形区画であり、屋敷・墓地・畑等に関連する区画が推測される。 | |
| 要約 | <p>物井地区土地区画整理事業に伴う出口遺跡と小屋ノ内遺跡の狭小な面積の発掘調査報告である。いずれも、鹿島川左岸の標高30m程の台地上に位置する。</p> <p>出口遺跡は、平成23年度17次・18次・19次の調査対象面積計1,606㎡の発掘調査の結果、縄文時代陥穴1基、古墳時代後期円墳周溝部分2基、中・近世溝・道2条が検出された。出口遺跡の主たる遺構である古墳群の一部である。</p> <p>小屋ノ内遺跡は、平成26年度17次・18次、27年度19次の調査対象面積計666㎡の発掘調査の結果、縄文時代炉穴1基、奈良・平安時代竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡2棟、中・近世方形周溝区画1基・溝4条等が検出された。小屋ノ内遺跡の主たる遺構である奈良・平安時代集落の一部である。</p> | | | | | | |

千葉県教育振興財団調査報告第765集

四街道市出口遺跡(3)・小屋ノ内遺跡(4)

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 XXV —

平成29年2月10日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿6-5-1

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿波809番地の2

印 刷 株 式 会 社 ラ イ フ
成田市東和田595
